

《2025 年 8 月 サロン in 清水 (通算 346 回) 報告》

部活動改革のゆくえをさぐる

—静岡市の中学生年代のサッカー競技を中心に—

【日 時】2025 年 8 月 17 日 (日) 14:00~16:30 (終了後は同会場で懇親会 ~18:30)

【会 場】SHIMIZU CROSS (静岡市清水区真砂町 5-22) およびオンライン (Zoom)

【テーマ】部活動改革のゆくえをさぐる—静岡市の中学生年代のサッカー競技を中心に

【登壇者】中村栄 (NPO 法人清水サッカー協会) 「部活動からしずおか地域クラブ活動への転換」

※中塚義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長) 「部活動改革の現在地」 ※進行役を兼ねる

【参加者 (20 名)】◎は NPO 会員、○は会員外のファミリー、無印はファミリー外

<対面 (13 名) >

○伊藤薫 (掛川 JFC) 、○田中俊也 (三日市整形外科) 、◎中塚義実 (NPO サロン 2002 理事長) 、
○野田直広 (富士電機) 、○横尾智治 (筑波大学附属駒場中高) 、
近藤晴路、鈴江智彦 (会社員) 、外岡哲 (NPO 清水サッカー協会) 、中村栄 (NPO 清水サッカー協会) 、
西村勉 (NPO 清水サッカー協会) 、林岳 (NPO 清水サッカー協会元事務局員／飯田ファイターズ元指導者) 、
望月昇 (以前に関東地方で小中学生と大人のサッカー指導に従事した経験あり) 、山本まさゆき

<オンライン (7 名) >

○安藤裕一 (株 GMSS ヒューマンラボ) 、○内田光侶 (PROUDERS 合同会社) 、◎高原涉 (宝塚 FC) 、
○張寿山 (明治大学／スフィーダ世田谷) 、○長野いつき (音楽家) 、○吉原尊男
坂元康成 (佐賀大学教育学部)

【報告書作成】中塚義実

【キーワード】部活動改革、地域移行・地域展開、中学部活動廃止、中学サッカーチーム、地域クラブ、
静岡市清水区、清水サッカー協会、中村栄、中塚義実

<目 次>

はじめに

I. プレゼンテーション①：中塚義実

部活動改革の現在地

II. プレゼンテーション②：中村栄

「部活動」から「しずおか地域クラブ活動」への転換

III. ディスカッション

はじめに

中塚：皆さんこんにちは。今日は部活動改革の行方を静岡市清水区の方々とともに探って参ります。

主催のNPOサロン2002は、「“スポーツを通じのゆたかなくらしづくり”」を“志”に掲げるNPOです。2002年のFIFAワールドカップ前から活動しており、2014年度よりNPO法人化しました。毎月開かれる月例サロン、その規模を大きくした公開シンポジウム、totoの助成金をもらって開催する高校生年代のフットサルリーグチャンピオンズカップなどが主な事業です。

今日は通算346回目の月例サロンです。「部活動改革」というタイムリーなテーマを、先月に引き続き取り上げました。7月は富山市で、高校の部活動を中心に取り上げました。

清水での開催は二度目です。2001年8月、FIFAワールドカップ開催前のJステップで開きました。そのときの報告書はサロン2002のHPに載っています。

【参考】スポーツが大好きな子供たちを育てよう

—プロを目指す子供たちと地域で楽しみたい子供たちのために何ができるか？

https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2001/2001-8.pdf

サブテーマを「静岡市の中学生年代のサッカー競技を中心に」と設定しています。部活動の地域展開がサッカーどころの清水でどうなっているのかを、問題意識としております。

16:30までノンアルコールの会をやり、その後、同じ会場で飲み食いしながら交流会を続けていくつもりです。

申し遅れましたが、理事長を務める私は中塚義実と申します。筑波大学附属高校で保育科教師・蹴球部顧問を続けてきました。この部は昨年度、100周年を迎えた歴史と伝統のある部です。日本のサッカーは東京高等師範学校、いまの筑波大学の卒業生が全国に赴任することで広がっていったのですが、そのお膝元である附属高校の卒業生も、もう一つのルーツ校と言える学校です。そこに38年間、異動することなく定点観測を続け、3月末で退職しました。そのタイミングで朝日新聞夕刊に取り上げてもらった記事を資料に添えました。退職後も日々充実して過ごしています。

清水との関係で言うと、大学の同級生に清水商業出身の風間ハ宏がいます。同期のキャプテンは望月一頼で、池田晃一も同期です。清水東の卒業生ですね。また、昨日もエスパルスの試合と一緒に見に行った三日市整形外科の田中俊也院長はサロン2002の古くからのメンバーで、清水東のOBですね。清水には縁もゆかりもたっぷりあるということで、今回の企画をさせていただきました。

では清水サッカー協会の外岡さんからもご挨拶をいただきたいと思います。

外岡：清水サッカー協会の外岡です。本日はサッカーに関する知見を共有する場に参加させていただき、たいへん光栄です。今日のお題に関しては私たちも非常に危機感を持っていまして、いま社会とスポーツの関わり合いの変貌が急激に起きつつある時代じゃないかなと考えています。

1つは、各分野でプロスポーツが非常に盛んになり、スポーツで食べていけるような世界です。かつてはサッカーも、日本サッカーリーグのころは、サッカーで食べていくことはできませんでした。プロ野球選手以外は食べていけない時代から、いろんなスポーツの選手が、それを専業として食べていけるような広がりができます。

その一方で、多分これまで教育システムの中で受け皿がある程度できていたスポーツが、教員にとって、自分たちの活動範囲を狭めるような対策が、いろんな団体や組織の中で考えられています。ひょっとしたら僕は、少子高齢化になって教員の数は相対的に過去より増えてるんじゃないのかと思うこともあるのですが、個々の子どもに対する責任の大きさは、我々が小学生の頃とは全然違うレベルで教員に要求されています。

こうした流れの中で、部活は本当にこのままでいいのか。やめる方が教員にとってはいいし、背負っているものが楽になる。しかしそういう環境の中で、放っておいたらこれから子どもたちが運動をしていく場がどんどん狭まってしまうんじやないか。

まとめます。プロスポーツに向かっていく、高みに対してチャレンジできるクラブのシステムがサッカーの場合はできています。一方で、楽しくサッカーをやりたい人たちはどうなるのか。そういう人たちの受け皿が、サッカーはもちろん、それ以外でもとても狭くなってしまう。こういうことに対して、僕らもサッカーの街と言われるところですから、そうはならないようにしていってあげたいと思いながら、一所懸命アンダーグラウンドでやろうと思っています。

先ほどもありましたが、サロン2002でこの題材を取り扱っていただけるのは大変ありがたいことだと思っています。皆さんからの活発な意見交換を期待したいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

中塚：参加者からも自己紹介いただいて中身に入ろうと思いますが、その前に。ご存知の方もおられると思いますが、サロン2002の会員で清水側で中心的に準備を進めてこられた宮城島清也さんが欠席です。先ほど少し顔を出されたのですが、数日前にお母さんが入院され、昨日亡くなられたとのこと。全員で黙祷を捧げたいと思います。ご起立ください。

＜黙祷＞

では会場の方から、次にオンラインの方から、自己紹介をお願いします。

＜報告書では省略＞



I. プレゼンテーション①：中塚義実

<部活動改革の現在地>

はじめに30分ほどお時間をいただき、「部活動改革の現在地」と題してお話しします（右図参照）。先月の「サロンin富山」でも同様の話をさせていただきましたが、「3. 高校部活動で何ができるか—38年間の“定点観測”と“実践”」は、今回は省略です。

まずは部活動って何だろうということで、少し歴史のおさらいをしておきたいと思います。

1. 部活動は…

1) 「遊び」からはじまった

筑波大学附属高校の今年度の卒業生は133回生です。100年少し前の30回生の手記があります。男子校だった戦前の高師附中の昼休みの様子です。「全生徒の推定70%が（グラウンド）全面に散らばって」、ゴムまりのベースボールの間で何組もがサッカーをやって遊んでいる様子です。「特にフットボールの好きなものは、放課後にもボールを蹴る練習をやっていた」。これが約100年前の蹴球部のはじまりです。

卒業後も、行った先々でサッカーをする場をつくっていきます。おそらく部活動の始まりとはこういうものなのでしょう。やりたい人がやりたい／続けたいから始めるのです。組織的にちゃんと遊ぶ仕組みが部活動です。

いろんな大人が見守ってくれるのですが「大人の過剰進出には要注意」ですね。善意から指導してくれるのかもしれないけど、本人が本当に求めているのかはわかりません。大会に関しても、勝ちたがっているのは指導者の方で、本人たちはそこまでこだわっていないかもしれません。

持続可能な部活動を考えたとき、やりたい人がやるということ、見守る大人は学校の先生だけではダメということは目に見えています。そして「自分のことは自分で、生徒自身がささえる部活動」を目指していくべきだし、それが本来のすがたなのだろうと思います。

こんなことを（例を挙げて）話します

1. 部活動は…

- 本来、「遊び」からはじまった
- 戦後、部活動は拡大した
- 部活動改革のうねりは何度もあった

2. 改革の方向性＝「新たな価値」の創出

- 「文化としてのスポーツ」の観点から

3. 高校部活動で何ができるか

- 38年間の“定点観測”と“実践”

4. 今後に向けて

大正期の附属中の校庭のようす②

全生徒の推定70%が全面に散らばっているというグラウンドコンディションでは、ショートパスをつないで、相手方のゴールに迫る以外に手はない。毎日そういう遊びをやっていれば、誰にも教えられずに、ショートパスの要領を自得する。附属のものならほとんど誰でも、ある程度以上にボールに対するなじみの深さ、ないし、なれのレベルの全般的な高さは、この遊びに由来するといえると思う。

（中略）特にフットボールの好きなものは、放課後にもボールを蹴る練習をやっていた。

「蹴球部の紀元前の話」岡山俊雄氏（30回）の寄稿

『附属中学 サッカーのあゆみ』1984年5月発行 60周年記念誌

わかったこと＆今後へ向けて

◆やりたい人がやりたい／続けたいから始めた。

組織的に、ちゃんと“遊ぶ”仕組みが部活動

- ・自主・自律・自由。自分たちの組織で自己管理！
- ・やるべきことをしなかったら、やりたいことはできない！
- ・いろんな大人が見守る（大人の過剰進出には要注意！）

◆持続可能な部活動を目指して！

- ・やりたい人がやる！
 - 続けるためには「ささえる」ための配慮が不可欠
 - 学校がささえ続ける「部」と、
 - そのときやりたい人が集まる「同好会」の整理を見守る「大人」は、学校の先生だけではダメ！
 - 卒業生や保護者、地域の力の活用を（ただし…）
- ・自分のことは自分で。生徒自身が「ささえる」部活動を！

中塚義実「部活動は時代とともに一筑波大学附属高校蹴球部100年のあゆみから」⁶
第61回 全国附属学校連盟高等学校部会教育研究大会資料 2019年10月18日

2) 戦後、部活動は拡大した

部活動は戦後、拡大の一途をたどり続けます。早稲田大学の中澤篤史先生が2018年1月の全国高体連研究大会の全体会で講演された内容を引用しながら紹介します。

部活動は戦前から、やりたい人がやりたいようにやってきましたのですが、戦後の教育改革においては「自由と自治のシンボル」として、GHQはじめ教育改革の担い手から奨励されます。民主主義のシンボルと位置付けられたのです。

そこから1964年の東京オリンピックへ向けて競技力を高める「選手中心」の考え方で展開していきますが、東京オリンピック以降、より「大衆化」へ向かいます。部活動というよいものをみんなのものにしていこうという平等主義です。部活動の必修化、あるいは必修科目としてのクラブ活動が学習指導要領に入ってきて、部活動的なものが拡大していくのもこの時期です。

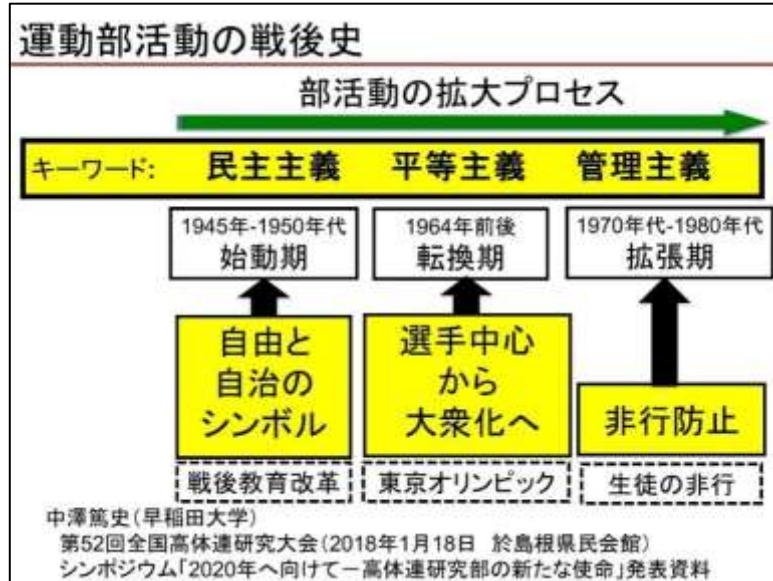
そして1970年代から80年代、ちょうど私自身の中学・高校時代と重なりますが、全国各地で学校が荒れていた時代です。大阪出身の私のまわりの学校も荒っていました。そしてそういうところでは「非行防止」の観点から、部活動が奨励されました。部活にエネルギーを注いでいれば悪さもしないだろうというような、管理主義の観点です。スクールウォーズなどのテレビの影響もありました。

民主主義 ⇒ 平等主義 ⇒ 管理主義という学校側の考えの中で、部活動はどんどん拡大していくということです。

3) 部活動改革の動きは何度もあった

拡大する部活動への対応は戦前からありました。野球が導入された明治・大正期、例えば早稲田と慶應のベースボールの試合は、単なる野球の試合を越えて、学校間の優劣を競い合う場として拡大していきます。野球部員は授業には出なくていいから次の試合に勝ってくれというように、学生スポーツとしてのあり方が、主に教育界から問題提起されます。東京朝日新聞紙上で展開された野球害毒論争です。その4年後に、系列の大坂朝日新聞社がいまの高校野球を関西で始めます。「学生野球はこうあるべき」だと考えたものを競技会として新聞社が企画したものです。しかしメディア主導の競技会はさらに盛り上がり、過熱化し、野球界だけではコントロールできないところまで行き着きます。当時の文部省から出された野球統制令は、戦後の学生野球憲章につながります。近年少しずつ緩和されてきましたが、学生野球を取り巻く様々な制約にはこのような背景がありました。

戦後拡大する部活動をめぐっては、部活動の位置づけの議論の先に「必修クラブ」が置かれた時期



何度もあった「部活動改革」の動き

◆戦前、過熱化する学生野球(運動部)をめぐって
1911野球害毒論争⇒1915(いまの)高校野球創設
1932野球統制令(文部省)⇒ 1946学生野球憲章

◆戦後、拡大する部活動をめぐって

(年号は、高等学校学習指導要領改訂年)

- 1970 必修クラブ導入
- 1989 部活動代替措置(部活動への参加で代替)
- 1999 必修クラブ廃止(部活動の位置づけ不明瞭)
- 2009 部活動への言及あり(「学校教育の一環として~」)

★1966頃～78熊本県「社会体育化」(1978に学校体育に戻る)

がありました。やりたい人が自由に加入する部活動とは異なるもので、学校現場では戸惑いが大きかったでしょう。部活動への参加で代替されたりしながら、それでも30年ぐらい、制度として続いていました。1999年に廃止され、部活動が学習指導要領に記載されない時期がありましたが、2009年から「学校教育の一環として」行われるものとして部活動が説明されています。しかし教育課程外です。

こういうのとはまた別の動きですが、1960年代の終わりから70年代にかけて、熊本県では部活動の社会体育化が進められていました。いまと同じ話です。1966年ごろから教員手当問題が議論されはじめ、県全体で社会体育化を進めたものですが、1970年の柔道事故問題で敗訴し、補償問題への対応が課題となります。運動部活動を勤務時間内に制限し、運動部活動のうち本来学校教育活動以外で行われるものについては新たな組織によって運営される必要があるとして社会体育へ移行しました。

1978年に災害共済給付制度が改訂され、死亡見舞金が大幅に改善されます。社会体育の保証制度より充実した災害共済給付を受けるためには、教員が指導する運動部活動となる必要があったため、社会体育化されつつあった運動部活動は再び学校体育に戻りました※。

このように何度も行き来しながら、似たようなことをやってきたわけです。

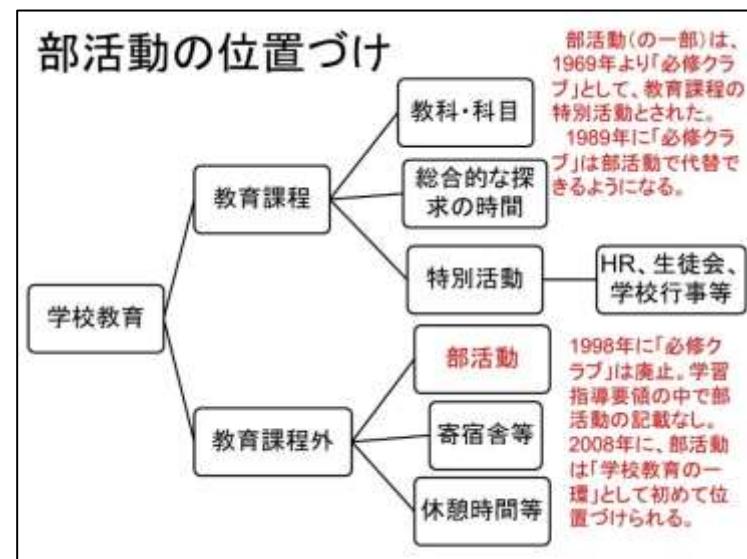
いまも部活動は教育課程外に位置づけられています（右図参照）。

【参考】部活動のこれまでの変遷等について（熊本市）

https://www.city.kumamoto.jp/kiji00346183/5_46183_331397_up_GCHA08BD.pdf

近年の部活動改革をめぐる動向を挙げておきます。2007年の野球特待生問題。昔からあったこの問題が表面化し、いまでは制度的に各校5名まで認められています。

2009年頃からは柔道の死亡事故問題がありました。武道の必修化の中のできごとです。安全・安心という観点で、学校教育活動の見直しが求められました。そして2012年末、バスケットボール部における主将の自死事件を機に、スポーツ界における「体罰」・暴力問題が大きく取り上げられました。2013年にいろいろな組織から指導のガイドラインが示されます。現場でどの程度の本気度で取り組まれたのかはわかりません。その検証も為されないまま、2016年には電通の女性の自死事件を機に「働き方改革」の話が出てきます。教師の多忙化、その主たる要因は部活動だということで「ブラック部活」という言



部活動をめぐる近年の動向

◆2007年 野球特待生問題

2012年度から「野球特待生制度」(1学年5名以下で認める)【高野連】

◆2009年～ 柔道部での死亡事故問題

2010年3月 全国柔道事故被害者の会

2012 武道必修化

2012年7月 学校における体育活動中の事故防止について【文科省】

◆2012年12月 桜宮高校バスケットボール部事件

◆2013年 「体罰」・暴力問題

2013年1月 運動部活動における体罰根絶に向けて(通知)【全国高体連】

2013年4月 スポーツ界における暴力行為根絶宣言【日体協・JOC・中高体連等】

2013年5月 運動部活動での指導のガイドライン【文科省】

◆2016年～ 「ブラック部活」問題 ※働き方改革 2017 部活動指導員制度

2018年3月 運動部活動のあり方に関する総合的なガイドライン【スポーツ庁】

2018年12月 文化部活動のあり方に関する総合的なガイドライン【文化庁】

◆2020年～ 「新型コロナ」のパンデミック ※部活動の意義は？

◆2023年～ 部活動の地域移行⇒展開 ※部活動改革は待ったなし！

葉が出て、運動部活動、文化部活動のガイドラインが示されます。そして新型コロナのパンデミック。部活動がまったくできない時期があり、部活動改革が一気に進んだ感があります。

このころ私は教員生活のほぼラストにあったわけですが、部活動ができなくなり、週末や放課後に自由時間ができる経験しました。「部活をやっていない先生はこんなに時間があったのか」ということを改めて感じたのがこの頃でした。

こんなドタバタの中で、部活動の地域「移行」、いまは地域「展開」と呼んでいますが、部活動改革は待ったなしということになっているわけです。

高体連という組織には、競技に関わる専門部と、部活動のあり方を研究・啓蒙する研究部があります。前者では全国高校総体（インターハイ）が、後者では全国研究大会が毎年盛大に開かれています。後者はほとんど知られていますが、私は研究部の活性化委員長として長らく関わり、2023年1月に全体会で講演をする機会がありました。そのときのスライドです。「部活動を学校の中で完結させるのは無理」です。本気で部活動改革に取り組もうというようなメッセージです。

それでも、部活動は、大事にしていきたい大切な学校文化です。担い手の意識が重要です。自分の教科のことだけでそれ以外は何もしない先生を「なにも先生」と私は呼んでいますが、「なにも先生は、教育に誠実に向き合え！」と。一方で、部活しかやろうとしない「部活先生は、全体を見よ！」と。

去年の12月、スポーツ庁のホームページで「地域スポーツ・文化芸術創造と部活動改革に関する実行会議」中間とりまとめが示されました。その中から一部引用させてもらいます。

「地域移行」から「地域展開」への名称変更については、「①学校内で運営されてきた活動を広く地域に開き、地域全体で支えていく」ということだとしています。地域「移行」だと、部活動のいい面も悪い面も地域に丸投げになってしまふんじやなかろうかという印象があり、「②新たな価値を創出し、より豊かで幅広い活動を可能とする」ものにしていくことが大事だということです。地域「展開」という言葉にはそういう意味が込められています。日本部活動学会初代会長の長沼豊さんは、最初のころから「地域展開」という言葉にこだわっておられましたが、ようやくその言葉がメインとなりました。

2023年1月12日 第57回全国高体連研究大会

部活動を取り巻く状況から感じること

◆部活動を学校の中で完結させるのは無理

- ・地域との連携／卒業生の活用など
- ・学校施設は地域の財産
- ・教師にとって本務ではない
- ・生徒にとっても、いますべきことがある

本気で「部活動改革」に取り組もう！

◆部活動は、大事にしていきたい学校文化

担い手の意識が重要

「なにも先生」は、教育に誠実に向き合え！

「部活先生」は、全体を見よ！

令和6(2024)年12月18日 スポーツ庁HP

(3) 地域全体で連携して行う取組の名称

(「地域移行」の名称変更等)

●上記の理念や地域クラブ活動の在り方等をより的確に表すため、「地域移行」という名称は、「地域展開」に変更。

【コンセプト】

①学校内で運営されてきた活動を広く地域に開き、地域全体で支えていく。

②新たな価値を創出し、より豊かで幅広い活動を可能とする。
※学校部活動から地域クラブ活動に転換した場合であっても、地域クラブ活動の実施に当たって、学校施設の活用等、学校との連携を図る必要。

「少子化」「高齢化」「過疎化」「人手不足」…

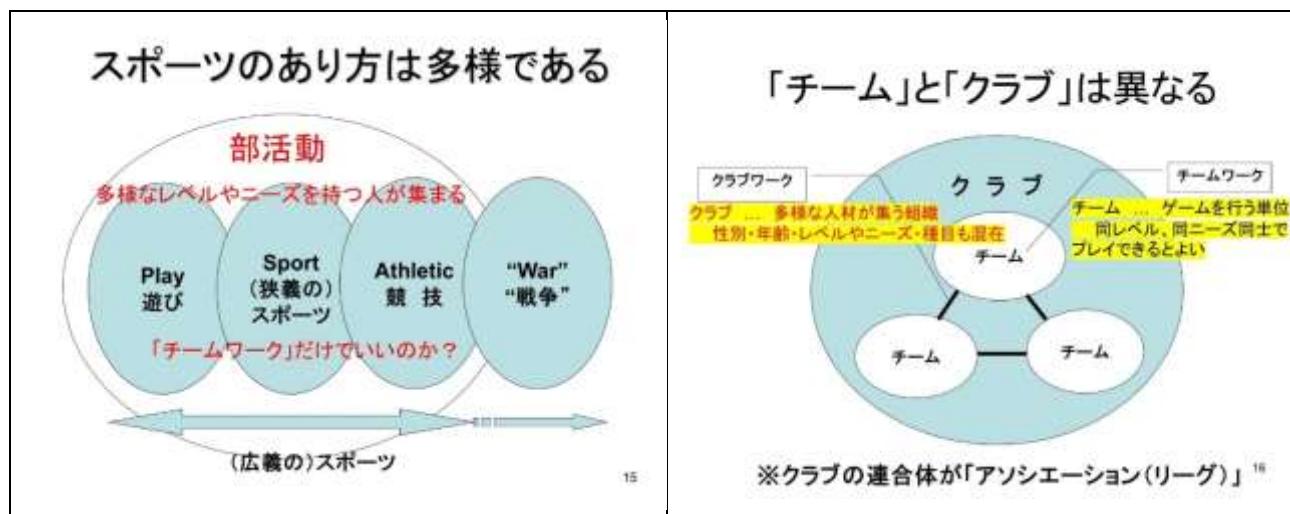
⇒ 地域社会の(ソーザー的)活性化のためにも、
部活動の地域展開を好機としたい！

地方ほど、より深刻な問題が見えてきます。「少子化」「高齢化」「過疎化」「人手不足」は深刻です。従来のままでは絶対無理です。地域社会のソーザー（創造・想像）的な活性化のためにも、部活動の地域展開を好機としたいと考えます。

おそらく地域に固有の課題があるでしょう。だから答えも地域ごとにあるだろうなと考えます。

2. 改革の方向性＝「新たな価値」の創出ー「文化としてのスポーツ」の観点から

改革の方向性、すなわち「新たな価値」についてみておきたいと思います。と言っても私自身にとっては「新たな」価値として再認識したわけではなく、大学・大学院でスポーツ社会学を学ぶ中で、文化としてのスポーツの観点から「当たり前」なのに、その観点から周りをみると「おかしいな」と思えることです。機会あるごとに話させてもらっていますが、改めて述べておきたいと思います。



スポーツは、非常に幅の広い文化です。「スポーツ」と言っていますが、芸術などの他の文化領域もおそらく同じだろうと思います。はじめにあるのは遊びです。やりたい時にやって、やめたい時にやめられるのが遊びです。やっているうちに「やめられない、止まらない」状態になる、それぐらい、プレイしている瞬間が楽しくて仕方ない状態を狭義のスポーツと呼んでいいでしょう。さらにやっていくうちに、プレイした結果に第一の重きが置かれる段階、それは勝利だったり新記録達成だったり、コンクールでの表彰だったり、結果に重きが置かれるようになってきます。本来の遊びから少しずつ離れていくわけですね。やっていることは遊びですが、姿勢としては競技、Athleticと呼べるものです。このように、結果に第一の関心事を持ってやっている人のことをアスリートというわけです。この段階ではやめたいときにやめられるなどと言っている場合ではありません。つらいけど、その先にある何かを求めて取り組む段階です。

芸術の世界にあるかどうかわからないけど、スポーツの場合、それぞれが背負う看板、例えば民族的なもの、宗教、国家。要は、スポーツという遊びが代理戦争のような形になっていく段階がその先にあり、それも含めてスポーツと言っています。

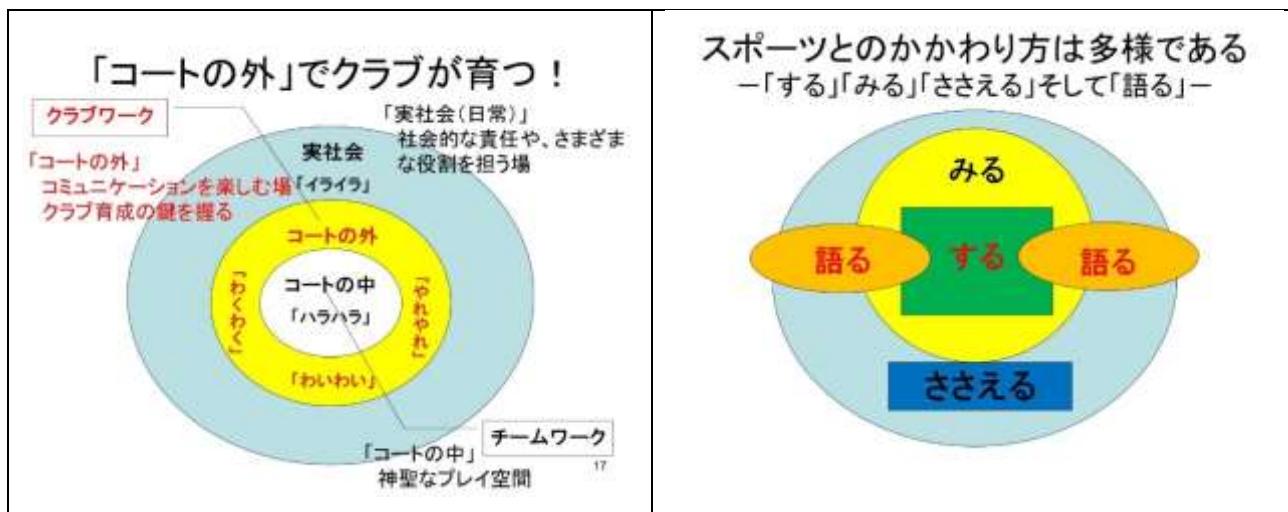
部活の中には、プレイ志向から競技志向まで幅広い人たちが属しているわけです。これをチームワークでくくろうとしても、それは無理です。チームというのはゲームを行う単位です。同レベル、同ニーズ同士でプレイできるとよいでしょう。入れ込んでやっている人たちの対戦相手は、同じように気合十分の人たちでやるべきです。そうじゃない人たちのチームがあっても全く構わないわけですが、お楽しみチームはお楽しみチーム同士で楽しめればよいのです。

大事なのは、違いを認めた上で、いろんな人が集まるクラブという概念です。日本ではチームワー

クの物語ばかりが強調されるけど、本当は多様な人たちが集い、互いをリスペクトし合うクラブワークが大事なのです。男子チーム、女子チーム、あるいは中学生チーム、高校生チーム、おっちゃんチーム、おばちゃんチーム、あるいはバレーチーム、バスケチーム、サッカーチーム。このように考えると多世代型・多種目型の総合型クラブになっていくわけですね。

試合に出る、大会に参加するチームだけでなく、クラブというものにもっと目を向ける必要があります。クラブの集まつたものがリーグ、あるいはアソシエーション（協会）です。協会や連盟は、チームを集めて大会をするだけではありません。

ここで言っていることは私が考えたことではなく、スポーツ社会学の基礎理論です。



ではどこでクラブが育つのかというと、スポーツ空間論が有効です。実社会のイライラ空間からコートの中のハラハラを楽しむ遊び空間に移動します。コートの中はチーム単位の活動が中心になるわけです。遊び空間の外側にはコートの外と呼べる空間があります。スポーツだったら更衣室やシャワー室。着替えながらわくわくして、今日はこういうプレーをやつたるで～思うわけです。終わった後はシャワーを浴び、高校生だったら駄菓子屋へ。駄菓子屋は。今はコンビニかな。それから大人だったら居酒屋で一杯やる、わいわいする空間。こういうところでコミュニケーションを楽しむのです。クラブ育成の鍵を握る場で、クラブハウスの機能です。

もう一つ。スポーツは「する」ことが原点ですけど、自分の知り合いを応援したり、レベルの高いプレーを見て楽しむこともあります。それらをささえることも楽しみとなり、それらを通して語ること、スポーツを語る、スポーツで語ることも楽しみの一つです。このような多様な楽しみを受け入れるようなクラブ育成が求められています。

これらを「日本のスポーツ観：これまでとこれから」に整理しました。

チームからクラブへ。「選手」という言葉を何となく使ってしまいがちですが、選ばれた人という意味ですよね。だから「補欠」が生まれ

日本のスポーツ観：これまでとこれから

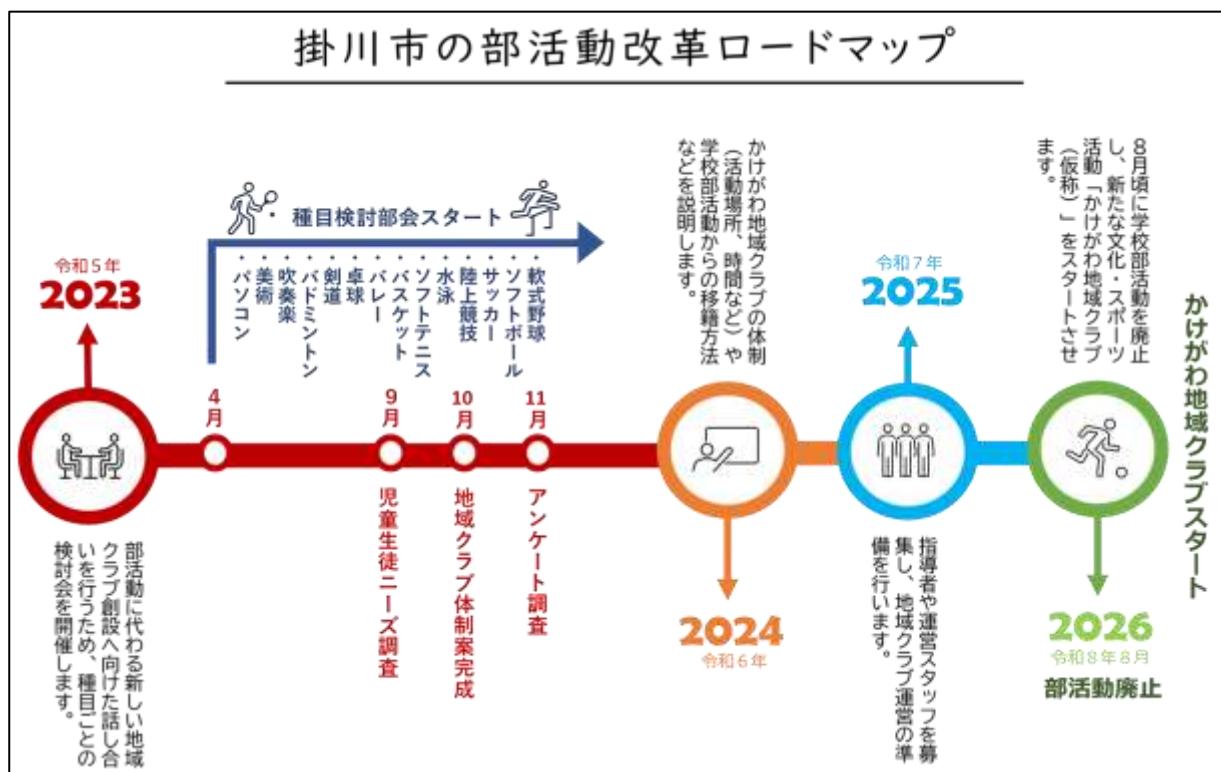
<これまで>	<これから>
チーム	→ クラブ
選手	→ プレイヤー
多くの補欠	→ 補欠ゼロ
競技志向	→ プレイ・スポーツ・競技
大会中心	→ 日常生活中心
トーナメント	→ リーグ
引退あり	→ 引退なしの生涯スポーツライフ
単一種目年中実施	→ 複数種目シーズン制
「する」	→ 「する」「みる」「語る」「ささえ」
単一価値観に集約	→ 多様な価値観を認める
学校・企業	→ 地域

てしまうのです。そうじゃなくて、ちゃんと遊ぶ「プレーヤー」へ。補欠ゼロ、プレイ・スポーツ・競技、そして大会中心ではなくて日常生活中心へ、負ければ終わりのノックアウト方式のトーナメントではなく、リーグ。

このような考え方で、学校・企業から地域へというのは必然です。

高校生の体育の副読本のはじめのほうに、私が執筆担当するページがあります。学校を生かしたクラブとして、愛知県半田市の成岩スポーツクラブを紹介しています。もう30年ほど前からやっている取り組みですが、成岩中学校の部活動を週3回に限定し、もっとやりたい人は成岩スポーツクラブの会員になって地域の人と一緒にやりましょうという取り組みです。この30年の間にいろんなことがありました。半田市のホームページを見ると、成岩以外にもいくつかのスポーツクラブが市内に立ち上がっているようです。いまでは改めて部活動の地域展開の先進事例となっていると思います。

静岡県掛川市も先進事例としてよく紹介されます。ロードマップによると2026年度には部活動を廃止し、それに向けて先行的に、地域クラブでの水泳部活動や美術クラブなど、運動部だけでなくいろんなことを始めています。全国各地でこのような活動が展開されています。



掛川市HP「部活動の地域展開」 <https://www.city.kakegawa.shizuoka.jp/gyosei/docs/136762.html>

一方で熊本市では「地域移行しない」という判断で、学校の中に部活動をちゃんと置いておくんだということが新聞でも取り上げられていました。熊本市立中学における新しい学校部活動の名称募集をしています。

このように、地域ごとに方向性が違ってもかまわないと思います。いずれにしても、青少年がやりたいことができる場を作り、それが地域の活性化につながってくるようになればよいと思います。

「部活動改革の現在地」について、ざっと話をさせていただきました。次に静岡市清水区のホットな動きについてご報告いただきます。

II. プレゼンテーション②：中村栄

<「部活動」から「しづおか地域クラブ活動」への転換>

<概要（配布資料より）>

前半：清水サッカー協会の取り組み経緯

- 1 清水サッカー協会の原点
- 2 2027年8月「部活動」を廃止し、2027年9月から「(仮称)しづおか地域クラブ活動」への転換についての予定（2025年1月24日 市長定例記者会見 資料より抜粋）
- 3 <このプランを考えた理由>
- 4 【解決案】部活動に代わる受け皿をつくる
- 5 2024年度の中東部の4種※と3種※のクラブチーム（※4種＝小学生 3種＝中学生）
- 6 地域クラブ活動（案）＝清水サッカー協会主導 2027年9月から活動予定

後半：清水サッカー協会の具体的な計画

- 1 清水区の中学生の誰もが参加できるサッカー環境を整える
⑤誰もが参加できる地域クラブ⇒6つのサッカーチームの紹介
- 2 予定する事業（清水サッカー協会の計画）
- 3 会場使用許可の課題について
- 4 指導者募集と指導者育成について（案）
- 5 審判の育成（清水サッカー協会 審判部の協力）について
- 6 練習や試合計画について
- 7 クラブ費（活動費）について
- 8 小学6年生に配布予定の【地域クラブ紹介チラシ】

前半：清水サッカー協会の取り組み経緯

1. 清水サッカー協会の原点

<「部活動」から「しづおか地域クラブ活動」への転換>と題して話を進めて参ります。

その前に、清水サッカー協会について。誰が作った文章かわかりませんが、そのまま示します。ここにおられる西村さんは20年間理事長を務められた生き証人ですが、私の方から簡単に話します。

昭和30年に清水サッカー協会が設立され、2001年にNPO法人清水サッカー協会となり、現在に至ります。これまで多くの偉大な先輩が、国内初の小学生のリーグ戦、指導者のためのコーチングスクール、選抜チームでの海外

清水サッカー協会の原点

清水サッカーのルーツは大正8年にまでさかのぼる。昭和42年国内初の小学生リーグをスタートさせ、同時に指導者育成のためのコーチングスクールも開校。日本一のチームを造る一環として、市内の江尻・入江・庵原小の子供達を集め、選抜チームを結成。『オール清水』は、日本協会の登録制度変更に合わせて、昭和52年に『清水FC』と名称変更。昭和50年にヨーロッパ遠征、昭和53年にはブラジル遠征を行い、世界の強豪との試合を少年期に経験。今でこそ高校生レベルの海外遠征は珍しくないが、当時の日本サッカー界が日韓戦で殆ど歯が立たない頃、清水の子供達は5勝3分の成績で帰国する。その後、グローバルな感性を持った子供を育むという指導方針のもと、子供達に「サッカー」という窓から世界を見せ続け、この頃から徐々に『清水FC』は国内の少年団大会で注目されるチームへとなっていった。

清水のサッカーの特徴のひとつとして、選手・指導者・保護者・行政が、互いに協力しあって強化に取り組んでいることが挙げられる。現在は、3歳のチャイルドスクールからシニアリーグまで、男女を問わずあらゆる年代の人達が清水区のどこかでサッカーを楽しんでいる。

遠征など、いろいろなことにチャレンジされ成果を上げてきました。小・中・高校のチームで全国優勝も何度か挙げて「サッカーの清水」ということでやってきたわけです。

一番大きなところは、清水エスパルスがこの町に誕生したということです。この話をしていいかどうかちょっと悩みますけれども、清水エスパルス、プロリーグを作ろうと一番最初に動いた方は、亡くなられた堀田哲璽先生と、いまも元気でおられる小花公生先生、この2人が金丸副総裁のところに行き、プロリーグをやりたい、ワールドカップをやりたいと熱く語りに行きました。するとその時の金丸さんが、「じゃあ小沢一郎のとこへ行け。彼が将来、総理大臣になるから、彼に言っておけばいいだろう」ということで。そんなところが動きが始まり、清水にプロチームが誕生することができました。エスパルスができたことで、清水のサッカーが大きく進んだところもあります。

先日、サッカースタジアムを清水駅の東側に作ることでエネオスとの間で提携できたということが、静岡市の難波市長から報告されました。大きな前進です。これからますます清水のサッカーが盛り上がり、清水の街が豊かになっていくことを願っています。

2. 2027年8月「部活動」を廃止し、2027年9月から「(仮称)しづおか地域クラブ活動」への転換についての予定 (2025年1月24日 市長定例記者会見 資料より抜粋)

続きまして、先ほど中塚理事長からもありました
が、スポーツ庁の方針を受けて静岡市も大きく変わることになりました。難波市長の前の田辺市長の時に、学校教育委員会を中心に、学校が部活動をエリア制にして緩やかに変換し、令和12年

には完全に土日も平日も地域移行していくプランで動いていました。しかし難波市長になり、全国の動きを受けて、突然このような方針を出され、中学校の先生たちも驚きました。「何も聞いてないよ」「いったいどうなるんだ」ということです。それを聞いた私たち協会も、「清水のサッカーどうなるんだ」ということで驚いたのを覚えています。

2025年1月24日 市長定例記者会見 資料より抜粋

「部活動」を廃止し、2027年9月から「(仮称)しづおか地域クラブ活動」への転換 今後の予定

「(仮称)しづおか地域クラブ活動」の実施に当たっては、これまでとは異なる新たな地域スポーツ・文化芸術活動の環境を構築していく必要があります。

静岡市においては、人口減少が続く中、これまでの生涯学習の仕組みの持続性も課題となっています。

静岡市教育大綱に示したように、生涯学習全体の中でその新しい仕組みを考えていく必要があり、その新しい仕組みが生涯学習の場の提供体制の持続可能性に繋がると考えています。

この実現のためには、既存の仕組みに捉われず、学校施設や生涯学習施設などの市が保有する「施設」と「社会の人材」を最大限活用し、市民や民間企業・団体の皆様との共働により進めていくことが重要です。

そのためには、教育委員会のみで取組を進めるのではなく、スポーツ、文化、生涯学習等を担当する様々な部署が一体となって取組を進めていく必要があります。

今後は、市長部局(総合政策局)を中心とした「しづおか地域クラブ活動推進プロジェクトチーム」においてクラブ、庁内一体となって、静岡市においてはどのような地域クラブ活動が良いのかを検討し、2025年夏までに具体的な在り方を決定する予定です。

担当: 静岡市総合政策局企画課

<このプランを考えた理由>

『2027年(令和9年)8月で中学校部活動廃止

→地域クラブ活動へ移行』

(難波市長12月提言より)

2025年夏迄に静岡市から具体的な地域クラブ活動の提案

【問題点】

2027年=現中学1年生が中学3年8月時点で部活廃止

→現小学6年生は中学2年の8月で部活廃止

現小学5年生は中学1年の8月で部活廃止

クラブチームや私学サッカー部ではない部活選手の
サッカー環境がなくなってしまう(約200名が対象)

3. このプランを考えた理由

そこで、これから受け皿ということになりますが、2025年の夏までには、静岡市から具体的な取り組み、仕組みが提案されることがわかりました。それまで何もしないでいいのかと。

4. 解決案】部活動に代わる受け皿をつくる

保護者や子どもたちからは「部活なくなっちゃうの?」という声が上がりました。現在の中1は中3までできますが、今の6年生は中2の夏で部活動が終わってしまいます。小5は中1で、小4は中学校に行ったら部活がなくなり、どういう形かわからないけど地域クラブになるらしいという、大変不安な状態になってきました。

クラブチームや私学に行かないけどサッカーをやりたい子たちが、清水区の場合およそ200名ぐらいいます。その子たちのサッカーの場をなんとかしなきゃいけないということで、外岡理事長が動き始め、受け皿を作ろう、清水サッカー協会で地域クラブを立ち上げようということになりました。2種は清水東監督の武田先生、3種の久保先生が委員長で、4種委員長の鈴木陽平など11名を委員として、「地域クラブ検討委員会」を作り、地域クラブを立ち上げていく話が始まりました。

5. 2024年度の中東部の4種※と3種※のクラブチーム(※4種=小学生 3種=中学生)

「2024年度の中東部」というのは、清水区の清水サッカー協会の中の4種と3種の様子です。まず4種という小学生のチームには24チーム、約1,000名いました。加盟24チームには、クラブや少年団、エスパースのスクール生やFC桜が丘ジュニアスクールなどを含め、1,000名の小学生がサッカーをやっていました。

そのうちの350名ぐらいが中学へ行き、強化型のクラブユースに所属します。クラブユース連盟に登録するクラブと、日本サッカー協会登録の翔洋中があります。6つのクラブのうちトップはやはり清水エスパルスジュニアユースで、続いてサルファス、FC桜が丘、清水東ジュニアユース、清水FCジュニアユース、有度FCモディフィオ、そして翔洋中学です。この7つのチームは強化主導で各学年20名程度、セレクションを受けて選抜された子たちが入っていくクラブチームです。この350名は10年以上前から変わらない形でやっています。今後も、より高みを目指して、高校・大学、あるいはプロを目指していく子たちの受け皿となる組織は変わらずに進んでいくんだろうと思います。

問題は、そうではない、中塚先生のお話にもあった楽しみ志向の子たちの場です。中にはやっぱり上を目指す子もいるんですけども、事情があって部活でやりたい子たちが約200名、清水にはいます。その子たちはいまエリア制で、例えば一中と二中の合同チーム、三中・四中・五中の合同チームで登録してやっています。単独で出ている六中や七中もありますが、部活がなくなってしまったそういう子たちはどうなるんだということで、地域クラブを作ろうということになったのです。

【解決案】

2027年9月から始まる地域クラブ
活動開始に向け、部活動に代わる受け皿

**清水サッカー協会で
「地域クラブを立ち上げよう」**

2024年度の中東部の4種※と3種※のクラブチーム (※4種=小学生 3種=中学生)

4種 2024年度中東部4種加盟24チーム(クラブ、少年団)1,026名
+4種 エスパルススクール生、FC桜が丘ジュニアスクール

3種 強化型クラブユース

高円宮杯U15リーグに参加(約350名)

中東部支部3種6つのクラブと翔洋中(日本サッカー協会に登録)

- ①清水エスパルスJy. ②SALFUS oRs ③FC桜が丘ジュニアユース
- ④清水東ジュニアユース ⑤清水FCジュニアユース
- ⑥有度FCモディフィオ(地域クラブも検討中) ⑦翔洋中(中体連に登録)

☆この7つのチームは強化主導

地域クラブ立ち上げに協力してもらえないかと検討委員が動いたところ、協会の理事だった方のご理解を得て清水FA北ジュニアユースが最初にできそうだというところまでたどり着きました。西村元理事長のご尽力もあり、地元清水でずっと少年団をやってこられた方に中学校もどうですかと話をしたものです。代表者は飯田ファイターズという少年団を指導され、協会の役員もされた杉山さんという方です。1つでも地域クラブのモデルとなるものを作らないということで依頼しました。

指導の責任者は誰かというところで、ここは中学校の先生で経験のある方に何人か頼んでみましたが、いま中学校の部活をみている先生たちは「何とも言えない」「どうなるかわからないので答えられない」ということです。その中で1名、ちょっと名前は伏せておきますが、ある先生が「やりますよ」と言って、部活もやりながらこのエリアの子たちをみますよと協力してくれました。

あとは庶務と会計をどうするかということですが、そこは「私がやります」と、中村が担当することになり三役が決まりました。こういう形でそろえて、他にも2~3のクラブができるんだろうかということで声をかけていったところ、何とかできそうな感じになってきました。

ここでざっくり、これまでの取り組みをおさらいしておきます。

6. 地域クラブ活動(案)=清水サッカー協会主導 2027年9月から活動予定

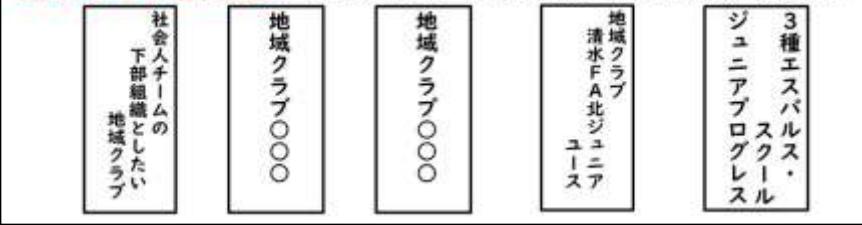
難波市長からの提言を受けて3月6日に清水協会の第1回地域クラブ活動検討委員会を外岡理事長がリモートで開きました。委員長に私、中村が指名されたのですが、まさか私はこの大役が回ってくるとは思ってなかったので、俺はそんなのやんないよと断っていたんですが、理事会で「中村が委員長をやりますから」と言われてしまったものですから、その場では断ることができずに、引き受けことになりました。

1回、2回、3回と地域クラブ活動検討委員会をやりながら、地域クラブを立ち上げてくれそうな方をいろいろ当たりました。少年団、中学校の先生、社会人などいろいろ声をかけていく中で、4つの地域クラブができそうだぞということになり、4月28日に地域クラブ立ち上げに協力してもらえる4チームの関係者の第1回会議を行いました。

3種 サッカーボ活動 2027年8月までの活動予定 中東部のチーム選手(約200名)

清水区の16中学校の部活動
エリア制:一中、二中で合同チーム、三中、四中、五中で合同チームなど

地域クラブ活動(案)=清水サッカー協会主導 2027年9月から活動予定



清水サッカー協会「しづおか地域クラブ活動」への取組

清水区の中学生(部活に入部した生徒及び部活に入部希望の約200名)対象の
サッカーの受け皿「地域クラブ立ち上げ計画」進捗状況

- ① R7.3/6 清水協会が、第1回地域クラブ活動検討委員会を開催
- ② 3/21 清水協会が、第2回地域クラブ活動検討委員会を開催
- ③ 4/4 清水協会が、第3回地域クラブ活動検討委員会を開催
- ④ 4/11 合同理事会(清水協会・中東部支部)で「地域クラブ立ち上げ」を説明⇒承認
- ⑤ 4/28 第1回地域クラブ立ち上げ4チーム関係者会議
- ⑥ 5/8 常任理事会で「誰でも参加できる3種の地域クラブやスクール」の確認
- ⑦ 6/25 外岡理事長が、静岡市総合政策局企画課 大村課長に報告
- ⑧ 7/14 中村常任理事が、静岡市中体連理事長 清水7中稻垣先生に報告
- ⑨ 7/22 中村が、静岡市総合政策局企画課 大村課長と大長指導主事に再報告
- ⑩ 8/17 中村が、静岡市教育委員会後援のNPO法人サロン2002で報告
- ⑪ 9/4 常任理事会で報告⇒4種(小学生)23チームに地域クラブ紹介チラシ配布予定
- ⑫ R8.1月～2月、第1回地域クラブ合同練習会を開催予定

今後の方向性について具体的な計画を立て、外岡理事長が静岡市の総合政策企画課の大村課長に報告をしました。大村課長も中東部の役員をされている方なので、サッカーの状況がわかっている方です。中村が静岡市の中体連の理事長、奈良中の稻垣先生に報告しました。稻垣先生の弟さんは、筑波大学准教授の稻垣先生です。掛川市のプロジェクトをやられている稻垣先生のお兄さんになります。

1つ大事なところが抜けていますが、外岡理事長が難波市長に直接、清水サッカー協会がこういう地域クラブを立ち上げるということを言ったんです。難波市長にじかにぶつけました。その後で⑨の7月22日になります。私が総合政策局に「ちょっとどうなってるか」じゃないけれども呼ばれました。この時、本日欠席された宮城島清也さんも一緒でした。宮城島さんは清水市役所の課長で清水サッカー協会の副理事長です。宮城島さんと私が呼ばれまして、総合政策局企画課の大村課長と大長指導主事に、再度こうやってきたんですということを報告してあります。そこで静岡市の具体的な仕組みについて、まだ公表されていませんが、構想については聞いてきました。また後でお話をします。

そして、今日の報告となります。

今後、このような地域クラブ紹介チラシを配布する予定にはなっていますが、そこもちょっと保留にしておきます。

ここまでが協会の取り組み、これまでやってきた経緯になります。

ざっくりでしたけれども、何か付け加えがあれば理事長からお願いします。

外岡：ポイントとして、いくつか押さえておきたいと思います。1つは、中村が言ってましたけど、クラブを実際に運営していくときの人の張り付け方というか、持つてくださる方をどうするかというのには悩みの種なんです。そこでまず、「何かあったら僕が責任取ります」と伝え、構造的に清水サッカー協会が全部の尻拭いをするのでぜひやってほしいということにしてあります。こういう我々からのリクルーティングがないと、たぶんいまのようにはなってないと思います。

それぞれのクラブをやってくださるポイントに、代表者と指導者と会計。この3つの縦軸ができていれば、基本的にはそれを回していくし、例えば1人、2人が動けなくなったときに、協会側がどういうサポートしていくかは明確になっているので、その3人をリクルーティングすることを、ずっと中村が人を探してくれてうまくはまったということです。

もう1つは、この形でやっていけば、他競技も将来的に受け入れができるということです。協会がアタマに立つことで、場所の確保についても学利協一学校以外の時間帯を地域の側でコントロールしている団体があるんですけども、そういうところとも話がしやすい部分があり、これならば、新たな組織をゼロからつくらなくてもいいですし、定款も協会側がきちんと作ってあげれば、各クラブの代表が細かいことはやらなくていいわけです。

中塚先生の話にヒントがいっぱいあったと思うんですけど、ユニットをそろえてあげられると、人がうまく集まっていくのかなということがあります。

つまり継続可能な組織にしていくことです。人の善意だけに頼っているっていうのはもうダメだ。安くても報酬を出せる形でやっていくことをしないと回っていかないということに対して、その準備も各クラブの方が苦労するのではなく、協会がまとめてやっていくことにしています。特に会費をどうするかについても協会側が示し、さらにこのような活動に共感してくださる企業を我々の方で探していくという形で、関わってくださる方々への負担を極力減らしているようなところです。満足いくお金にはならないと思うんですけど、報酬をきちんと出せる、継続可能な形を目指しつつ、準備を進めているというような感じです。

後半：清水サッカー協会の具体的な計画

1. 清水区の中学生の誰もが参加できるサッカー環境を整える

①誰もが参加できる地域クラブ⇒6つのサッカーチームの紹介

では後半です。具体的にサッカー協会で計画する地域クラブに向けての計画を8つほど話をしていきます。1つ目は、清水区の中学生の誰もが参加できるサッカー環境を整えるということです。

先ほどのクラブチームです。エスパルスやサルファスはチャンピオンになるという明確な目標を持つチームです。中にはついていけなくてやめ

て、中体連の部活に戻る子も毎年います。逆にこの6～7チームに入らなかつたらサッカーやめちゃう子も実際あります。小学校までガンガンやりすぎてサッカーが嫌になって、中学は他の部活に行っちゃう子も実際はいるわけです。ですから小学校で1,000名やっていても、中学までいくと600名ぐらい。今年はちょっと少なくて580名になりますが、1,000名がそのまま中学校へ行くと半分でも500名。だいたいそんな感じの状況です。

先ほど言った6チームです。最初に清水FA北ジュニアユースができました。名前は決まっていませんでした。いろいろ考えました。エスパルスの名前をもじって清水エスパなんとかなどいろいろ考えたのですが、これも西村さんの発案でFAがいいだろうと。清水サッカー協会のSFA、僕が着ているシャツにありますが、清水サッカー協会で作ったチームだということが明確になります。そして、本当はエリア制でなくてどこでもいい。清水だったらどこ行ってもいいということで、会場校、練習場所はある程度絞られてくるので、エリアをとって名前をつけることにして4つのチームができました。清水FA北ジュニアユース、清水FAセントラルジュニアユース、清水FA西ジュニアユース。本当は②は清水FA中央と日本語にしてほしかったのですが、ここの代表の深澤理事がこだわってセントラルにしたいというので、そこは代表の深澤さんの気持ちを汲み取りました。④のアウローラも、最初の話では清水FA南ジュニアユースということだったんですが、代表の清水さんが静岡県社会人リーグ1部のアウローラ静岡FCの代表をやっており、高校生も社会人チームに出ています。その下部組織的になれば、清水サッカー協会が立ち上げた中学生から社会人までつながって生涯スポーツとなります。アウローラ静岡FCにはセカンドチームもあって、リクルートじゃないですけれども、AチームとBチームがある中のBの方に出られます。清水FAというよりもアウローラ静岡FCでいきたいというので、「いいねえそうしましょう」と賛成しました。会計について、①から③は清水サッカー協会で会計を集約する。④のアウローラは自分たちでやるよということですが、規約は協会と全部一緒に揃えてやるということで、名前だけは独立性がありますが、やろうという方の気持ちなので、それはそれでいいってほしいなということでそういう名前を使っています。

もう1つは清水シティFCジュニアユース。これも静岡の社会人リーグでやっているチームの下部組織です。ここの代表というか関係者は、日本サッカー協会に登録したい、いずれは日本クラブユース連盟加盟のチームにしたい。また中体連があるのなら中体連の大会にも出たい。「その他登録」という枠

1. 清水区の中学生の誰もが参加できるサッカー環境を整える

(1) 清水サッカー協会だけに登録して活動する4つのチーム

- ① 清水FA北ジュニアユース
- ② 清水FAセントラルジュニアユース
- ③ 清水FA西ジュニアユース
- ④ アウローラ静岡FCジュニアユース

(2) 日本サッカー協会と中体連登録を予定している

- ⑤ 「Shimizu City FCジュニアユース」
 - ・清水協会主催の「清水銀行杯」「市民大会」にチームとして参加予定

(3) サッカースクール

- ⑥ エスパルスのジュニアプログレス（中学生対象）
 - ・スクール生徒でチームを構成し、清水協会が計画するリーグ戦やカップ戦に参加予定

があるんです。自分たちでやっていきたいからということで新しくできたクラブチームです。清水には先ほど言ったようにこれだけのクラブチームがあるので、新しくできると人が集まらないのが心配です。実際のところいま清水FCジュニアユースも有度FCも、一学年で選手は11名を切っており、大変厳しい状況になってきました。そういうところでですが、代表の方に思いがあるので、ここは独立した形になります。

エスパルスの育成コーチにも話をしました。今年の4月から、小学生のスクールと同じように中学生的スクールをやっています。ジュニアプログレスという名称です。そこも選手が集まってくれれば、チームを結成して清水サッカー協会のリーグ戦にも参加していきたいとなっています。

受け皿としてこの6チームが、清水区で立ち上げることができました。

2. 予定する事業（清水サッカー協会の計画）

では今後どうすることをしていくかと言いますと、まだ全然周知されていませんので、これから静岡市の仕組みがちゃんと公表されてから、関係者とすり合わせをして、こんなチームができますよ、クラブができますよということを紹介していきます。年明けには早速合同練習会をします。指導者にはエスパルスの山下芳紀コーチ。今日は事情

があって来られなかったのですが、彼が引き受けてくれまして開催する予定になっています。

来年4月からは、無料の合同練習会を計画し、部活動に入っている子たちも一緒に参加するということを考えています。

3. 会場使用許可の課題について

会場については、先ほど学利協の話がありましたが、学利協は静岡市のスポーツ振興課が管理している学校施設利用運営協議会です。これが各小中学校にあります。清水区の場合、まあ静岡もそうですが、基本的にすべての小学校・中学校にナイター設備がついています。運動場は17時からライトをつけることができます。

今は部活が優先なので17時からグランドを使うことはできませんし、土日も祝日も部活優先なので、利用には制限がありますが、今後部活がなくなるばあ17時からの時間が空くということで、ここが部活動の代わりになる時間と考えています。

何度も言いますが、先ほどのクラブチームの選手たちはほとんど19時から、ナイターで練習をしています。この子たちはそれが当たり前になっていますが、部活で来る子たちは一度家へ帰ったらもう

2. 予定する事業（清水サッカー協会の計画）

（1）2025年9月以降に地域クラブ紹介チラシを配布予定

- ①配布対象～清水区4種（小学生）23チームの6年生向け
- ②6チーム合同練習会（無料）の予定を周知
- ③第1回合同練習会は、2026年1月～2月を予定
(指導者はエスパルスの山下芳紀コーチ)

（2）2026年度4月～ 無料の合同練習会を計画（部活動のない日時）

- ①練習会参加対象：小学6年及び中学1年（部活動に入部している選手）
- ②練習場所：清水協会で確保
- ③参加者募集：4種と3種チームにチラシを配布して協会で把握

（3）2027年度以降 清水区の地域クラブチームでリーグ戦やカップ戦を計画

3. 会場使用許可の課題

2027年度9月から、利用できるように静岡市へ要望

- ①小中学校の体育施設を平日17時～19時
- ②" 土日祝日の昼間

（2027年の夏までは部活動優先のため、土日は使用不可）

- 各小中学校の学校施設利用運営協議会に団体登録し、
体育施設を平日17時から19時、土日祝日でも利用できる
ように静岡市スポーツ振興課に申請・許可を求める。

出てこないんじゃないかなと。そこまでしてサッカーを、他のスポーツもそうですけども、やるような意欲のある子は、だいたい強化クラブに行っています。そうじゃなくて本当にサッカーやりたい、中学からサッカーやりたい、そういう子たちのためにも、17時からの時間帯ですね。学校は授業が終わって4時半に下校してからは中学校のグラウンドでやるのが一番いい。それと土日祝日の昼間を考えています。それを学利協に加盟して、施設利用をしていきたいなと思っています。

4. 指導者募集と指導者育成について(案)

指導者については、現在は代表指導者1名とその知り合いでという形になっていますが、今後継続していくために近隣の大学、静岡大、常葉大、東海大などのサッカーチーム員の学生アルバイトですね。他県では、東京などでも普通にやっていますので、ぜひお願いして協力を依頼したいです。サッカーチームの伝統として、地元の中学生と一緒にやれるようなことを、まだお願いには行ってませんけど、そのように考えています。

そして小中学校の教員に、清水でサッカーをやっていた人がいますので、その人たちに直接依頼しています。16時45分まで仕事があるので17時にはグラウンドに来てくれると、何人かに声をかけています。「何とも言えません」としか返事もらえませんが、地域とつながるということで、自分が住んでいるエリアの会場に行ってもらいたいなと考えています。

(4)の地元企業について、名前はまだ言えませんけれども大手企業には2回ほど、理事長と2人で頼みに行きました。スポンサーのことも含め、指導者の派遣について、会社側も社会貢献や地域貢献を考えているので前向きに検討しますという返事をもらっています。それが実現されたら本当にありがたいなと思っています。ライセンスがない指導者もいますので、D級ライセンスが取得できるように援助もしていきたいと考えています。

5. 審判の育成（清水サッカー協会 審判部の協力）について

地域検討委員会には審判部委員長の前田さんも出でもらっています。ただサッカーをするだけでなく、ユース審判の育成も地域クラブの中でぜひ紹介し、自分たちでサッカー運営をしていくということを目指したいです。全て大人が用意した部活や地域クラブでなく、自分たちで運営していくためには審判は育成していきたいと考えます。

4. 指導者募集と指導者育成について(案)

- (1) 平日17時～19時、土日祝日に指導できるスタッフを募集
- (2) 静大、県立大、常葉大学、東海大学のサッカーチーム員に指導者を依頼(指導者の育成を支援する)
- (3) 小中学校教員に、17時以降は勤務時間外なので、指導を依頼(静岡市教育委員会に協力を求める)
- (4) 地元企業に、月に数回程度、指導者として社員を派遣を依頼
- (5) ライセンスがない指導者は、日本サッカー協会のD級ライセンス取得をの援助をする。
(各チーム、指導者ライセンス・審判ライセンスを取得スタッフがいるようにする)

5. 審判の育成（清水サッカー協会 審判部の協力）

中学生でも日本サッカー協会の4級審判取得が可能であるため、一人でも多くの選手に審判資格を取れるように、地域クラブが審判部と協力して育成に努める。

(審判取得にかかる費用の援助、審判部への謝金など、地域クラブが援助したい)

6. 練習や試合計画について

先ほど少しかぶりますが、練習は平日17時からを考えています。大会については、まずは清水サッカー協会主催でいま市民大会と清水銀行杯をやっています。これは日本サッカー協会登録チームでなくとも、学校のクラスで出ることもできるし、例えば野球部がサッカーの銀行杯に出ることもできます。そういった大会を昔から清水でやっていますので、ここに出ることができます。これに加えて新しくできた地域クラブ、先ほど言った6チームで、清水FAのリーグ戦やカップ戦の計画を考えています。

このカップ戦やリーグ戦には、地元企業にお願いして冠スポンサーとして、なんとかリーグというのを、会社の名前を入れさせてもらったり協力してもらうことを頼んでいくつもりです。

7. クラブ費（活動費）について

先ほども出ましたけど、クラブ費のことが大きな課題です。いまの部活動は、多くて一人年2万円ぐらいです。浜松の方の中体連のある部活は、「ひと月500円だよ」と言っているところもあります。部活をやっている感覚からすると、クラブになつて月5,000円、6,000円、7,000円、8,000円出すとなると、そこまでしてやるのかとなり、引いてしまうことがあるんじゃないかと思います、だから3,000円ぐらいでやれたらしいなと考えています。

いま清水でクラブユース連盟に加盟するチームは、月謝が1万2000円ぐらいかかり、年だと遠征費も含めて20万円ぐらいかかります。それだけ一所懸命やっているクラブですけど、そこには行かない子たちにとって、これだけのお金を払うのは、学習塾を含めると大変な出費になるので、その辺のクラブ費はなんとかリーズナブルにしないといけません。指導者への謝金も含めて考えていますが、1つの地域クラブに20名集まれば何とかなる。少ないところは多いところから補填するような形で、協会全体でやりくりしていくことで考えています。

8. 小学6年生に配布予定の【地域クラブ紹介チラシ】

最後になりますが、チラシを作っています。9月に配布するつもりです。しかしこれにはいま待つがかっています。先ほど外岡理事長も言いましたけれども、静岡市ではサッカーだけでなく、バレー、野球、バスケなどいろいろな部活、文化部を含めて、地域クラブを総合的に考えてやっていきたい構想があるようです。それがまだ公表されていないので、サッカーだけが先走ってやっていくのも良くないので、いま待っているところです。総合政策局企画課も大変忙しいようで、難題がいっぱいあるようで公表されませんけれども、公表されたら先ほどの4チームの関係者と代表者会議をしまして、静岡市の構想に添えるようにして地域クラブの立ち上げを紹介していきたいなと考えています。

6. 練習や試合計画

- (1) 平日17時から19時を基本とする(週に2.3日程度)
- (2) 平日19時~21時、週1回位、照明を利用しての練習もあい得る。
- (3) 土、日、祝日は、練習や試合を予定
・他地区の地域クラブと交流戦を計画
- (4) 清水協会主催の市民大会と清水銀行杯に参加
- (5) 清水協会主催で、清水FAリーグ戦やカップ戦を計画

7. クラブ費（活動費）について

- (1) これまでの部活動→ひとり年2万円程度の部費と
プラス遠征費を集金
 - (2) 現在、強化重視のクラブユース連盟登録のクラブ
チームの年会費は、ひとり15万円~20万円と
プラス遠征費を集金
 - (3) クラブ費は、登録料、保険料、会場使用料、スタッフ
謝金、用具代、消耗品購入などに使用予定
- 清水サッカー協会だけに登録する4つの地域クラブの
活動費は、保護者に毎月3~5千円をお願いする予定

以上ですが、後半の具体的な計画について付け加えがあつたらお願ひします。

新たに「地域クラブ」で サッカーを楽しもう

清水区の小学校6年生の皆さんに「清水サッカー協会からのお知らせです」

現在6年生の皆さんが中学2年の令和9年8月で静岡市の部活動が全てなくなります。でも大丈夫です。清水区では、令和9年9月から新たに誰でも参加できる地域クラブ活動「サッカーチーム」に展開するので、中学3年の卒業まで部活動から地域クラブでサッカーを続け、高校でもサッカーに挑戦しましょう。

そこで、清水区で立ち上げた地域クラブとサッカースクールを紹介します。部活動が終わったら自分の行きたい地域クラブのチームやスクールを選んで、サッカーを続けましょう。

	チーム名	主な練習会場(予定)	代表者・連絡先
1	清水FA北ジュニアユース	飯田中、飯田小、他	杉山勝徳・090-3252-6206
2	清水FAセントラルジュニアユース	一中、江尻小、他	深澤敏之・090-8131-4524
3	清水FA西ジュニアユース	有度一小、他	佐藤貴史・080-3679-5700
4	アウローラ静岡FCジュニアユース	清水小、三中、他	清水雅隆・080-8130-6618
5	Shimizu City FCジュニアユース	有度二小、七中、他	鈴木大介・090-8136-4439
6	エスパルスのジュニアプログレス	エスパルスドリーム フィールド清水	清水エスパルス サッカースクール

1 地域クラブのチーム紹介

(1) 清水サッカー協会で立ち上げた3チーム

①清水FA北ジュニアユース ②清水FAセントラルジュニアユース ③清水FA西ジュニアユース

(2) 静岡市の社会人(中部支部1種)下部チームで、高校生からでも社会人チームに参加可能

①アウローラ静岡FCジュニアユース ②Shimizu City FCジュニアユース

(3) エスパルスのサッカースクール(毎週1回ドリームフィールド清水で活動)

①エスパルスのジュニアプログレス「詳しくはエスパルスのHPで」

2 地域クラブ合同練習会のお知らせ【中学の部活動に入部希望者、その他誰でも参加できます】

(1) 令和8年1月から2月に予定、会場・日時を清水サッカー協会HPで確認してください。

(2) 参加対象者は、小学校6年生の誰でもOKです。

(3) 練習会は参加無料です。申し込みは清水サッカー協会までお願ひします。

3 問い合わせ先

(1) 清水サッカー協会(平日 9時から17時)

①TEL: 054-337-0302 ②FAX: 054-337-0722 ③e-mail: shifa@bj.wakwak.com

(2) 各チームへのご質問などは、清水サッカー協会またはチーム代表者に連絡をお願いします。

外岡: 清水以外の方にはよくわからないかもしれません、小中学校のほぼ全てにナイター設備があります。清水感覚でいうと、日没に左右されないでできるという感覚がございます。これは西村さんはじめ、清水を支えてきたくださった方がそれを当たり前にしてくださったという歴史があります。

中村の方でいくつかあった流れの中で言うと、教員が現場でどう動くのかが、おそらくどこの地域も同じだと思いますけど、スタンスがはっきりしていません。我々も、夏までというアバウトな形で言われていたので、そろそろお尋ねに行きたいところです。

人材確保の問題で言いますと、企業に対して、私の方は働き方改革とクロスさせませんかと言って

います。いま育休・産休で時短になっている方もいらっしゃいますが、社会貢献のために時短にするのはどうですかというようなことを提案し、某社の経営者の方はおもしろいですねというような反応をしてくださいました。

あと、協会が関わっていることのメリットもあります。自由度と言ったらしいでどうか。大会を設定できるのは、他の組織ではなかなか考えづらい。協会としてはとにかく普及という目的を持った大会をこのようにやっているんですよということです。特に我々のイメージしているのはリーグ戦です。ですから協会以外の形で入ってくるチームもウェルカムというような形で、子どもたちがスキルを積み上げていけるだけの場を作れるのは我々のメリットというか、我々がやっていることで受けられる生徒さんにとってのメリットの1つと考えていいと思います。



III. ディスカッション

中塚：現在進行中の、大変興味深い取り組みをご紹介いただきありがとうございました。説明にあつた通り、全国的にいま動いている部活動の地域展開よりももっと前から、清水にはサッカーの土壤があり、小中学校の校庭に全部ナイター設備がついているような環境が前提になっている気がします。

ここから質疑応答や意見交換をしていきます。オンラインの方も遠慮なくご発言ください。

◆清水の中学校活動の現状

望月：大前提として、いま話された清水の部活動は、強制参加なのかそれとも任意で、やらないのも選べるのか教えてください。

中村：現状は強制ではなくなりました。昔は全員が一度はとりあえず入る状況でしたけど、いまは入らない子がいますし、部活に入らないで、先ほど言ったクラブチームで活動する子もいます。うちの長男は野球部で、中学校の部活だったので夏休みは毎日学校に行きましたけど、三男はクラブチームでやっていたので夏休みに一日も学校に行きませんでした。平日も部活はなくて、学校が終わるとクラブへ行く。静岡市も部活動は自由選択で、入らない子は入らない、あるいはよそのクラブへ行く、部活でやると、三つの枠になっていますね。

望月：それは最近なんですが、それとも…

中村：うちの息子は31才だから11年前にはすでにそうなっていました。同級生は当たり前のように、入らない子は入らない。入っても結局行かない子は行かないですね。だからもう形骸化している印象です。昔は絶対全員が入るものでしたけど。そんな状況になっています。

西村：静岡地区と清水地区で温度差があるんです。静岡は若手のサッカー指導者が学校にいましたけど、清水はどちらかとあまりいなかったんですよ。どちらかいうと地域と一緒にやりましょうという感じで、いろんなことを地域の人を入れながらやっていました。そういうことをずっとやってきました。学校の先生じゃなくて地域の人がやるという土壤を作ったんですね。それが学校の先生が中心に部活動をするとなってきます。ちょっと違うところの話で、部活動を先生がもうちょっと頑張ってやりましょうという意向もあるように聞いています。

ただそうしていっても、先生方は転勤があったりするので、先生に依存する形はどう考えても成り立たなくなっていくんですね。だから地域と一緒にになってやっていく。自分の地域に帰ってやってもらえる態勢をどう作るかということも考えなきゃならない状況になると思うんですね。

若干、清水と静岡が違っているもんですから。我々の方はどちらかというと、今までの20年ぐらいの間で、地域の人が一緒にになって大会をやっていくのが当たり前です。その人たちが小学校のベースをそのまま中学校に上げてもらい、同じ人が担当してもらう。少年をみていた人たちが中学生の面倒もみてもらなながらやっていく形にして、他の人たちがエリアの中で応援していくという感じです。ということで、ちょっと違うんですよね。静岡方式と清水方式は。もともと全然違うところが合体したことだと思います。

◆利用施設について

田中：質問していいですか。さっきの話で、中学生対象のチームを4つ作り、活動する拠点は小学校のグラウンドということですか。

中村：いえ、基本的には中学校と、小学校2校ぐらいの会場を用意しております。例えば清水FA北であれば飯田中と飯田小をベースに考えます。

田中：その二つは隣接しているのですね。

中村：そうです。そうするとその周りの北区の庵原中とか六中とか袖師中とか、その界隈の子たちが通いやすい。

田中：では中学校のグラウンドでやる、もしくはその隣の小学校のグラウンドでやるということ。

中村：そうですね。小学校の指導者からは、一緒に練習するのはOKだよという許可をもらっています。

田中：するとグランドと同時に、体育館やプールも使えると。

中村：体育館やプールまではちょっと。体育館は部活のない時間帯だったらしいんですけど、清水の場合、ほとんどの体育館が7時からママさんバレーで埋まっていますので。

田中：なんで質問したかというと、更衣する場所です。体育館あたりでいいのかなと。また練習が終わったら汗を流しますよね。そのときにプールにあるシャワーを使えればと。困るのが、部活が終ったあと体操着のまま帰ってきちゃうんです。ちゃんとシャワー浴びて着替えて家に帰ってほしいというのが願いですね。これを機に、どうせ施設が借りられるのだったら、プールのシャワーも利用していただいて、きれいになって帰ってもらうというのがいいのではと。

ちなみに小学校、中学校は芝生のグラウンドですよね。

中村：いやいや。芝生グラウンドは1割以下ですね。

田中：将来的には芝生にしていきたいということですね。ありがとうございます。

中塚：「新たな価値の創出」というのは、部活が終った後にちゃんとシャワーを浴びて着替えて帰るという習慣も含まれるかもしれないですね。

◆事故があったときー保険加入の問題

中塚：私からの質問は、いろいろ立ち上げる中で、何かあった時の責任の所在という話が必ず出てくると思うんですけど、清水に16校ある中学校の中で合同チームというのもあったわけですよね。

中村：いま現在そうですね。

中塚：するとけがなどが発生した時の保険対応としては、いまの合同チームは学校教育活動の一環として災害共済給付で対応する。新たに始まるものについては学校教育活動ではなくなるので、別の保険に加入して対応するということでしょうか。

外岡：そうですね。基本的には、我々が他の種別でやってるのと同じような形をイメージしています。例えだけがが発生した時に、現場での対応はするけれど、その後については自己責任でやってくれということを定款の中にも記しています。常識的な範囲を示したうえで、基本的には協会側が肩代

わりをしますということです。先ほども言いましたが、それぞれの地域でやってくださる方に対して配慮していかないと、腰を上げてもらうのがなかなか大変です。

西村：補足します。清水FAにかかわるチームは、すべて清水FAとして登録するんです。だから清水サッカー協会の保険がみな等しく適用されます。いま社会人も少年もすべて、チームごとの登録というよりも協会に登録していて、保険加入も協会としてやっています。例えば清水FA北ジュニアユースとセントラルが合同でどこかに遠征に行くとなったら、清水協会の事業としてやることになりますので、一つの保険で対応できるんです。選抜チームをつくったときも、選抜として保険に入らなきゃいけないのではなく、清水協会の事業として行うので保険もそれで対応できます。学校とは全く関係がないところで、協会として登録している形になります。

アウローラや清水シティFCは独立したチームになりますので、そこはそこでやるような形になっています。

中塚：アウローラや清水シティFCは、さっきの話でいうと、自分たちのクラブを作ろうとしているわけですよね。すでに大人のカテゴリーのトップチームもあって多世代で活動している。その下部組織のような感じで、今回の動きをリンクさせていきたいということですね。

外岡：そうです。我々の第一の目標は普及に関することであり、サッカーを続けたい人たちの受け皿になるというか、新たな集団をどのようにつくるかという意味でスタートしています。④アウローラ、⑤清水シティ、⑥ジュニアプログレスは、志を同じくする仲間ととらえています。クラブチームになると「ライバル」というのが大きくなるのでしょうか、我々としては完全に「仲間」というスタンスです。各クラブの考え方も尊重しながら「一緒にどうですか」という感じですね。「うちが責任持つてもいいですよ」という話までしたんですけど、それぞれのクラブがクラブとしての目的を持っているので、というお話です。

◆中体連の大会は？

参加者：教えてもらいたいんですけど、地域クラブに移行すると、いまやっている中体連の大会には、清水FAの4クラブは参加するんですか。大会参加はどうなるんでしょう。

西村：中学の大会はなくなりますから。

外岡：それに関して言うと、我々がいま一番気を使っているのが、現役の中体連チームです。我々の方が先走って、いまの中学生サッカー部に人が入らない状況ができてしまうのが、我々としてはハレーションの1つだなと思っています。どうせなくなるチームだから、このチームにいてもしょうがないや、となってはいけないということです。

西村：中学の大会がなくなるって言ったのは、僕は中学の教員だったから。中学の部活がなくなるということは、先生が部活をやらないということです。先生方が会合を開いて大会を開いていましたけど、会合自体もなくなるでしょう。顧問の先生たちの組織の上に校長先生の組織がありますが、部活がなくなるとそこで話されることもなくなるでしょう。本当になくなるのかは、静岡市については基本的なところが出てこないのでわかりません。全国の足並みが揃っておらず、やるところもあるしやらないところもある。ということで、先が見えない。ただ、仕組みとしては、学校でやらないとなればそういう組織がなくなるということです。静岡市は補助金を出しませんし組織も作りませんと言われちゃうと、そうなる可能性はあると思います。それをはっきり言わないでいろんなものが曖昧にな

っているところなんです。全国中体連も、やるかやらないかはっきり言えない状況です。先行きはわからぬのが現状でわかりにくく、申し訳ないですけど。

外岡：そういう意味で気を使うのは、現役の中学校の先生方に、我々のやっている活動がネガティブに受け止められないようにということです。ですから現状で「この活動を手伝ってくれ」とは、ほぼ言わないんです。

ただ、委員会には三種、中学校の先生も入ってくださっていて、我々も話をしています。さっきも言いましたけど、この先どうなるかわかりません。こうなっていったらいいですよねというロジックの積み上げについては中学校の先生からも積極的にご意見をいただいている。当然、彼らが納得できない限り共存していくことはできないと思っています。ですから上下のカテゴリー、小学生（四種）の人たちと中学生（三種）の人たちからいろんなアドバイスをもらいながら、審判部の人たちからもいただきながら進めています。現状では委員と協会内だけの話ではあります。これから大事なのは、これから入ってくる四種の小学生の子どもたちに、こういう受け皿があるということをきちっと伝えていくことです。そこに対しては、できるだけリーチの高い情報の知らせ方、静岡市の広報などに積極的に載せていただけるように活動していかなければいけないと思います。

◆準備開始のきっかけー新市長の方針

横尾：部活動の廃止を決定するまでに、どれくらいの年月というか、いつごろから先生方に聞き取りをはじめ、準備をスタートさせたのでしょうか。おおむね同意されているからいまのかたちが示されているのだと思いますが、反発される先生はいなかつたでしょうか。

中村：先ほども言いましたけど、田辺前市長の時、学校・教育委員会が中心となってエリア制をやっていました。清水区の場合は16の中学校を、人数が少なく学校が近いところで集めてエリア制のチームにしました。令和8年までは、土日は外部指導者に任せ、平日は先生たちでやっていました。しかし平日と土日の指導者が違うとうまくいかないことが出てきたんです。そこで先生たちは、結局土日もやる。練習だけやって土日は外部指導者ってどう考えてもおかしいじゃないですか。現場はおかしいことがわかっていて、現場にいる静岡市の先生は部活をずっとやっています。いまも変わらず。僕の教え子でもう41才になる、清水から静岡に異動した中学校の先生に「清水戻ってこいよ」と言っても「いやいや、うちこっち来ちゃったんです。部活は普通にやってますよ」って。そういう感じです。それでも静岡市は、令和12年には平日も土日も地域社会に移行する構想があったんです。でもそれは緩やかな構想であって、普通に部活は続くだろうと。熊本市の話じゃないんですけど、部活は続けられるもんだっていう感覚でいました。

でも1月に難波市長に代わっていきなりこうなったので、現場の先生は「聞いてないよ」って感じでした。そのまま令和12年までいくと思っていて、移行はしないだろう、先生たちがこのままやればいいんだよという意識が、静岡市の先生たちの中にはあります。でも若い先生には、清水協会ではこうのをやっていることを伝えてあります。トレセンの先生たちも「駿河区、葵区の部活動どうなるの」って言うけど、部活がなくなるなら駿河区・葵区も（清水区がやろうとしているように）こうなるんだよって話をしているけど、結局そこまでできずに部活のまま続いています。サッカーは人数がいるし指導者もいるので、いまの状態で普通にやっています。

市町村合併の2007年に、清水と静岡のサッカー協会中部支部の上部団体として静岡市サッカー協会ができました。そこで情報交換していますけど、そこにも温度差があるのが現状です。

外岡：もうちょっと言いますと、緩やかに移行していくと言っていたのが、市長が変わったタイミングで突然、「部活動を変えていきます」という話が、2024年12月に降りて来たのが現実的なところで

す。それは市長の考え方。為政者が変われば方針が変わるという典型的な流れです。それがしっかりと出てきちゃったんですね。そこで我々としては、去年末から急に動きだしたところです。

◆指導方針の擦り合わせ

中塚：オンラインの方からもご発言があればお願いしたいんです。いかがでしょう。

磯：磯ですがよろしいでしょうか。自己紹介でお話ししましたが、国立市もいま、部活の地域連携、「移行」じゃなくて国立市では「連携」という言葉を使い始めています。学校の先生の働き方改革ということで、平日は学校の先生、土日は外部指導員という形で進んでいます。

先ほど、平日は先生で土日だけ外部指導員だとうまくいくわけないというような話がありました。私もそこは懸念しているところです。平日と土日で違う指導者の場合、子どもに対してどういう方針で部活動を続けていくのかについて意識合わせをしないと難しいと思います。

最初の話で「遊び」という言葉がありました。スポーツをどう捉えるかといった部分での擦り合わせ、指導方針を固めるべきだという話でしたが、そこが具体的には見えてこないのが現状です。

清水の場合、枠組みがかなりでき上がっているようですが、子どもたちへの成長支援とか育成方針について、各コーチの判断でバラバラにやっていくのか、何か共通の指針があるのか。そのあたりについてお聞かせいただけますでしょうか。

外岡：基本的には、同じ方針を持たせたいと思っています。我々としては、先ほどから言っている通り、チャンピオンシップを目指すのであればクラブチームなり私学なり、東海大学などはかなりレベルの高い、クラブチームに負けないサッカーをやっていますので、そういうところでやってもらいたいと思っています。それぞれのレベルでサッカーとどう対峙していくか。子どもたちが楽しんでやっていけるようなクラブを目指したいと考えています。

一方で、それだけではいけないとも思っています。基本的にはいわゆる「しつけ」の部分。団体競技としてどのように過ごしていくべきか。人間教育の根幹みたいなものはきちんと伝えられるようにしたいと思っています。

また、遊びだけでいいのかというと、これも違います。リーグ戦みたいなものをきちんと我々の方で作っていく。その理由は、参加している子どもたちのレベルに応じて目指せるものがあるということです。「このリーグ戦で1位になろうね」というように、目指せるものを同時に提供してあげる。その中から、いい人間も育ちますし、可能性を持った子たちが次の段階で、例えば清水東のサッカー部を目指すとか、清水桜丘のサッカー部を目指すというような形を出していけると思っています。ハイブリッドのようになりますが、とにかくサッカーを好きになってもらえること、全人教育の場になること、それぞれのレベルでそれぞれの目指すものを持てること、というような方針で運営していきたいと思っています。

◆理想とするスポーツ環境

田中：皆さんに聞きたいんですけど、皆さんが中学校や高校生だった時に、どんなスポーツ環境だったら良かったなって思われますか。ずっとサッカーやっていたかった、テニスをやりたかったとか、いろんなスポーツをやりたかった、合同部活動をやりたかったとか…。

望月：明らかに、レベルで分けて、ちゃんとした指導者をつけるというのがいいですね。先ほど僕は、部活動が任意かどうかをお聞きしましたが、僕のところは強制しかありませんでした。僕が中学生の時、1996～98年ですが、清水エスパルスのジュニアプログラムが沼津にあったんです。毎週金曜日。僕は南部町というところで遠いので、そこへ行くだけで部活の顧問と喧嘩ですよ。

田中：僕も普段医者で臨床をやってますが、「5月病」があるんです。大学生じゃなくて高校生。中学校では夏で部活が終わっちゃって体重もドーンと増える。あるバレー部の女の子は、また高校ではバレー部でやろうと思ったら体が動かない。これ5月病ですね。一貫してやっていればそんなことはなかっただろうに。

中塚先生と一緒に2006年ドイツのワールドカップに、ただ遊びに行っただけじゃなくて、スポーツクラブを見に行ったんです。すごく印象的だったのは、ドルトムントのスタジアムの横にスポーツクラブがありました。香川真司がのちに行ったクラブではなく、大人のチームは6部というクラブです。そこに、膝にドンジョイという装具を付けている高校生の女の子が来たので、ちょっとインタビューしたんです。「あなた何やってんの」と聞いたらハンドボールだったかバレーだったかをそのクラブでやっている。手術した後だと。「今日は何しに来たの」と聞いたら「プールに来た。医者に行ってプログラムをもらって、ここには水泳のプロがいるからその人に今日みてもらって水中トレーニングをする」。「毎日それをやるの」って聞くと「まさか。明日は柔道」って言うから、「柔道って膝が悪いとできないでしょ」と聞くと、そうじゃなくて「柔道の呼吸法を教えてもらう。このクラブにはそのプログラムがあるからやるんだけど、何でそんなこといちいち聞くの?当たり前でしょ」みたいなこと言われました。ただじゃないんです。月1,000円か、1万円はかかるないと思いますけど会費を払って、普段はハンドボールとかバスケやバレーをやって、たまたま同じクラブの中にある施設を使って、その道のプロの指導を受ける。あとで「日本の柔道どうしてる」って聞いて来た人は、五輪に出たような元選手で、そういう人が指導している。スポーツ環境としては日本より相当恵まれてるなあと思ったんです。高校生であれが経験できて、中学生もたぶんいたと思うんです。いいなあと思いました。そういうものを目指せばいいと思うんですよね。

学校の先生はたぶん2時か3時に開放されて部活はない。完全に外部委託。地域の子たちがそこに集まって、そこには元はプロだとかアスリートが教えている。レベルがどうかは僕にはわからないけど、大人のサッカーチームは6部ということでした。

中塚：中学・高校の時にどんな環境があつたらいいかという質問に戻ると、そんなことこれっぽっちも考えてなかつたと思うんです。中学・高校のときは。部活はあるもので、毎日やるもんで、練習中は水飲んだらあかんし、しづきもあつたし…。だけど暗いイメージはまったくなくて、めちゃくちゃ面白かった。中学時代は熱血体育教師のもとでサッカーやつたわけですけど、面白い先生でした。なんと言っても学校の人たちと長い時間ともに過ごせていたのが大きくて…。

先月の「サロンin富山」で、富山の高校部活動に対する意識調査結果が紹介されました。高校生たちは部活動の地域展開については頭にありません。そりやそうですよね。知らないから。先生方は意識しているようですが、高校生は現状の部活動に関して危機感は抱いておらず、いまのままでいいという。「地域クラブが選択肢としてできたらどうしますか」という質問もあったけど、「よその学校の人たちと一緒にやるよりも、自分たちの学校の人たちとやりたい」みたいな回答が結構ありました。高校の調査ですし地域性があるかもしれません。富山の高校では学校の中のつながりを大事にしているような印象もありましたし。

清水独特の背景はよくわからないけど、小学校の時から他の学校の子と一緒に過ごす時間が、サッカーの大会や地域の運動会などを通して豊富にあり、その続きで地域主導のこういう動きが具体的な構想につながっているのかなと感じました。

外岡：正直に言うと、私としては清水という地方にいて、本当にサッカーに育てていただいたというのがあります。それは友人関係や人間関係に至るまで。上下、左右、全部つながっているんです。

いまここに西村さんがいらっしゃいます。先ほど名前が出た堀田先生や小花先生、長澤和明さんと

か。下の年代でいえば大槻克己くんとか、上下左右全部の人脈がつながってるわけなんです。そういうところで人生60年以上過ごさせていただいて、いましなきゃいけないのは、我々が享受した良かったものを、少しでもいま暮らしている人たちに返さなきゃいけないということです。私たちが感じた、よかったですなので、それを地域に返すのは当然のことというか、まだまだ続けなきゃいけないかなと考えています。どうですか？

中村：昔は小学校も単独でチームができたんです。浜田小学校だけとか〇〇スポーツ少年団とか、単一チームだけでした。いま静岡、清水にたくさんクラブチーム、少年団がありますけど、いま少年団登録、スポーツ協会に登録するチームは少ないんですよね。少年団という名前でありながら、やつてることはクラブ的に、親に負担をかけないようにやっていこうという清水のチームも結構いるんです。少年団の名前を外そうかと考えていたり、実際に取っちゃったチームもあります。小学校の会場を使っているだけであって、いまはいろんなところから来ています。

ちょっと話がずれるかもしれません、小学生は親が送迎します。親が送迎できる範囲なら、清水区の小学校のチーム、静岡の小学校、どこでも行くような状況になっています。すごいのは、ガウショという強いクラブチームが静岡市にできたんですけど、浜松から来ます。清水の高部JFCという強いチームにも富士市から来ます。小学生でもトップを目指すクラブにはそういう状況があります。僕らがを目指している地域クラブの方は、そういうところに行かないでサッカーを楽しんでやっていく子たちです。サッカーをやめないで続けていける環境をつくっていかなきゃというところで地域クラブを作りますので。

中学生の場合には自転車があります。清水区だったら10キロ以内なので、だいたい自転車で行けます。静岡市の方は学校教育のエリア制を使うつもりのようですが、僕らはエリアじゃなくて、行きたいクラブへ行きなさいと。清水FA北の近くの子であっても、別のところへ行っても構わないよ。同じ協会なので流動的にしたいなと思っています。清水サッカー協会が一つのクラブとして、いくつかのチームができるということです。

チームも11人制にこだわらず、8人制でやってもいいです。小学校は8人制ですから。もつと言えば5人制のフットサルにしてチーム数を増やして大会をやってもいい。「補欠ゼロ」でみんなが試合に出られるようにしたいなと思っています。自分の息子はサッカーを高校まで、清水商業でやりましたけど、試合に出してもらえる者と出られない者の差がもう…。遠藤友則という、清水東を出てACミランでトレーナーをやっている者がいるんですが、「おかしいぞ清商。百人もうまいやつがいるのに、なんで試合に使わねえんだ」って。試合に出た、と言っても3分で交代です。なんだこれって。まあこれが清水で全国優勝したチームの実情です。僕は自分の息子を通して散々それを見てきました。それでも歯をくいしばってやって良かったという者もいます。けどなんか清水サッカーおかしいぞって思ってましたが、案の定、いま清水の高校は停滞してしまいました。静岡学園に全部持っていくれてしまっています。清水のうまい子も「学園に行く」って言いますから。うちの孫はディフェンスですけど、「俺、学園に行く」と言ってますから。憧れなんですよね。強い子たちはそういうところに憧れるのがあるんです。強いチームはやっぱりシンボリックであってほしいわけです。

地元の清水で、静岡で、強いチームを作ってほしい。でも、そこを目指す子たちはいるけど、そういう子たちも200人ぐらいいる。その子たちの受け皿を作る。そしてサッカーを楽しんで、高校、社会人、生涯スポーツであってほしいなというのが、この協会で考えている普及型の地域クラブということです。ちょっと話は広がりましたけど。

外岡：余談ですけど、中塚先生の講演を聞いていて、僕も大学時代に勉強したことが走馬灯のようによみがえってきます。日本と西ドイツの運動、スポーツがだいぶ違った方向で進んできたのはご存知だと思いますが、日本の場合は学校教育、体育ですよね。スポーツではなく、エducationの一

つ。学校というしっかりした組織を持っていたので、そこに負うところが多い。お金をどこにかけていったかというと、各地域にインフラを作る行政をやっていたのが日本でした。国体をいろんな地域で順番に開催することで、各地に体育施設を作ってもらう。立派な運動施設、体育館や陸上競技場やサッカー場ができていく。これがスポーツをするきっかけになると言われてやっていました。西ドイツは黄金計画と言って、当時あったクラブチームにお金をどんどんつぎ込んで、そこでいろんな競技をやって地域の人の健康を増進する。その頂点としてブンデスリーガのチームが強くなり、そこに資金が集まる。すると、国がお金を出さなくても地域の人の健康をクラブで回していく。

それが30年たつたらどうなったかというと、日本は国体やってたので「箱」はできただけれどノウハウが残っていない。ドイツはクラブが中心になって地域の人たちの健康が保たれる。箱作りは一所懸命やったけど、中身づくりが追い付いていなかったのが日本です。たぶん教育制度に一任しちゃつたのが、いま生まれている日本のスポーツの現状につながっているのかなあということが、先生の講演をお聞きして思ったことです。

原点に帰ると、『ホモルーデンス』や『遊びと人間』じゃないんですけど、やっぱり遊びって、いろんなものを生んでいく、創出していく原点にあるのだと思います。普及ということでは、多くの人にスポーツに関わってもらう場を提供していくことが大事なんだと。これからももっと大事になってくると思います。

◆参加者のレベルとニーズに対応した環境づくり

伊藤：すべてに言えると思いますけど、まずは普及から入りますよね。やってるうちに好きになって、友だちと意気投合して刺激を受けて、競技性を究めていきたいなど。それと、体格やスピード、いわゆる運動能力はなかったけど、少しずつ養われて高くなってきたときに競技性を求めていく。そういう子どもを育てたい。

壁を外してあげれば、4つの地域クラブで普及として始めた子が、もう一段、二段、上にいける道も作ってあげられると思います。そうすれば、中には日本代表選手が生み出されるなど、シンボルとなるような例が出てくる可能性もあると思うんです。強化の方は強化型クラブに任せて、地域クラブはあくまでサッカーに興味・関心を持つ子や親に楽しんでもらいたいというのはいいんですけど、線を引いてしまうのはどうかなと思っています。

中体連とは別に、サッカーではクラブ連盟が、歴史は浅いけれどあります。Jリーグのユースも町クラブも入っています。今日紹介されたことは、本来あればクラブ連盟がすべきことだと思います。

掛川の場合、地域展開がすでに始まっていますが、掛川の地域クラブに入った子たちは、いまのシステムだと対外試合もできません。今年度、県内でクラブ連盟登録は7チームしかありません。浜松に行くとあるんですけど、試合するにも県内だと西部に行ったり東部に行ったり。いまクラブ連盟は、強化のことしかできません。クラブ連盟が普及と強化のリーグ戦の担い手になればいいと思います。清水でできる4つのクラブには、いずれ強化型のクラブになるところがあるかもしれませんし、うちはちょっと難しいねというところも出てくるでしょう。集まった子たちのレベルで変わってくると思うんです。だから、あえて線を引くことはないんじゃないかなと思います。

僕は、清水サッカー協会が強化型クラブを作ればいいと思っていた。エスパルスとか東海大翔洋中とかに遠慮しなくて、俺たちだって作ろうと思ったら作れるだろうと。それがまた魅力になって、普及のすそ野が広がっていけばいいなと思っていました。でも、トレセンもあるから、そこまでやらなくていいというのもその通りです。

そんなことで、将来像がどこの地域も描かれてないと思います。地域に任せると国は言っていますが、どうなっていきたいかをしっかり考えてもらいたいですね。

掛川で言うと、野球選手で上を目指したい子は県外に行っちゃいます。掛川西高校もあるけど県外に出ていきます。強化型とエンジョイ型が同じところでやっているから、親同士で亀裂があるという

か、人間関係がギクシャクしてくる。うまくしてほしいという親がいれば、これで十分という親もいて難しい。ユニフォームを買うことについても「何で買うの」という親もいるぐらい、価値観の違う人が集まっています。

田中：いまの話で思い出したんですけど、名門の静岡学園中に入った子がいて、本人はやる気まんまんだったんだけど中学校1年の夏、まだ半年もたたないうちに大怪我して地元に戻ってすることになりました。学園の部活を辞める、イコール学校を辞めるんですよ。富士市内の公立中学校に戻ってきて、半年たって怪我も治ったので「で、どうするの？」って聞いたら、「サッカーやりたいけど、今更公立の学校の部活ではちょっと顔向けができない」と。中学1年生がそんなこと考えるのかと思ったけど、清水の地域クラブのような受け皿があれば、その子は、学校は地元の中学校、みんなで楽しめる地域クラブでサッカーはできる。表現は悪いんですけど、地域クラブは上から落ちてきた子の受け皿にはなるはずですよね。

いまお話しされたのは、いまは下でやってるけれど上に行きたい。本当は中2で行きたいけどいまのシステムでは行けないのがネックだという話ですよね。それはいずれ制度が変わるとと思いますね。

中村：清水サッカー協会の地域クラブ検討委員会には、清水東の武田先生もメンバー入ってるし、桜が丘と清水東のジュニアユースの監督に、「地域クラブの中にもうまいのいるから一緒に練習参加させてくれる」と言えば「いいよ」と。うまい子は清水東ジュニアユースとかサルファース、清水FCもそうだけど、本人のやる気さえあれば練習生として参加してもOKってあります。それは清水の強みで、強化型のチームにも地域クラブの子が練習生として行けます。また清水東高の高木先生は、月曜日は東高サッカーチームは休みだからそこで地域クラブの活動と一緒にやってもいいよと言ってくれています。高校も、中学部活やクラブの子たちが確かに中心だけど、高校行くとやめちゃうことが多いんですね。なぜかというと8月で終わっちゃってるから。あの半年のブランクが大きいんです。でも、僕らが作る地域クラブは3月31日までやります。4月1日から高校行くまで地域クラブが中3の受け皿になるんです。それをいまの中学校の先生たちはやらないんです。残念ながら。

清水は、西村さんが作ったエスパルス杯というのが12月にあって、中体連のトレセンの子たちは12月の大会までサッカーをやるけれど、一般の200人の子たちはやめさせられて、受験勉強やれって言いますよ。僕らも地域で考えて、そういう子たちも週一回は社会人とサッカーしようと、チラシを作ったので配ってくださいと言ったら、中学の先生は「配れません」と言います。なぜかというと「受験勉強だから」。「おまえ受験勉強って一体いつやるんだよ。毎日やるのかよ」って。「中学校は校長判断だろ」って。理事長は切れてましたけど、これじゃ学校に期待できねえよと思って…。

まあいろいろ考えて動き出しました。清水には清水西高、清水東高、桜丘高校、東海翔洋もありますので、高校生ともつながりを持って、地域クラブの子も高校サッカーやりたいなという思いにつなげていきたいと考えています。

伊藤：それが清水の強みだと思いますね。掛川じゃそこまで連携できてない。それはすごい。

田中：あともう一点お聞きしたい。リーグ戦をメインでやりたいということですね。すごく良いと思います。2002年の監督をやったトルシエが、2001年か02年にドクターを集めたんです。フランスからも人が来て。一つの命題が、足関節の捻挫。中学・高校生で外側靭帯が切れました。皆さんどうしますかということで、ディスカッションしたんです。日本でも著名な先生が、これは靭帯再建術で、私なら30分ぐらいの手術でできるようになると言うんです。けどフランスの先生は「なんておかしなことを言うんだ。中学・高校生にメスを入れるのか。自然治癒を待たないのか」という話なんです。ギプスで治るものは治りますからね。ただしその間はどうしてもリハビリで6ヶ月ぐらいかかる。手術

するとうまくいければ3ヵ月です。日本のドクターの話は、彼はそれによって夏のインターハイに出られた、冬の選手権に出られたって言うんです。医者にとってもそれが称号の1つになったかもしれません。だけどトルシエもフランスのドクターも、あきれて手を挙げちゃったんですよ。「アンリが日本にいなくてよかったです」と。彼はマルセイユの下部組織で、高校2年ぐらいで鞄帯を切って、そこでギブスで保存療法をしたらしいんです。その後に筋トレなどをやってマルセイユに戻った。その時にベンゲルがトップチームをみていたけど、「あの高校生、動きがいいじゃないか。何でトップにいないんだ」と聞いたら「今まで怪我してた」と。「じゃあすぐトップに上げろ」と。怪我の功名じゃないけど、その間リーグ戦には出ていない、ユースの試合にちょっと出たときベンゲルがたまたま見ていてトップに引き上げて、たしかフランスのワールドカップも20歳ぐらいで優勝メンバーに加わっていますよね。もしアンリが日本にいたら、手術して、高校の冬の選手権で、もしかするとまた再断裂して代表に選ばれなかつたかもしれない。どちらが正解というのはないけれども、少なくともユース世代まではメスを入れなくて済むんだったら、メスを入れない方がいいと思います。

もう1つ言えば、日本の高校生の場合はトーナメントしかないので、どうしても無理をする。だけど向こうは、あくまでも目標はプロだったり生涯ずっとやりたいから、いまメスを入れなくて済むんだったらいまやらなくていいという選択肢がある。リーグ戦かトーナメントかという違いが如実に出たんですね。

あれは結論は出なくて、結局日本の先生は、俺だったらアンリはもっと早く復帰させるとか言ってました。それはどうかなというところがありましたけど。そういう意味ではリーグ戦を主体にこういうのを考えていくことは非常にいいと思います。

伊藤：各地域との交流がリーグ戦でできればもっといいなと思います。

中村：実は富士市サッカー協会副会長の寺内が同期なんですけど、彼は富士市で校長を退職した後にサッカースクールを始めて、一般社団法人で地域クラブを作っています。そういうところと交流試合を、富士に遠征に行くこともやろう、清水にも来てと言っています。彼の方は中体連登録を考えていた、サッカー協会登録もすると難しくなるかもしれませんけど、うちとしてはまず清水サッカー協会への登録だけなので、まずは富士市のつくる地域クラブとの交流試合をお願いしてあります。

当然、静岡の駿河区・葵区にも地域クラブができるでしょうから、交流していくことを考えています。いまは6チームしかないけれども、もうちょっと枠は広がるんじゃないかなと予想しています。

伊藤：僕の期待ですけれど、静岡型の地域クラブはあっていいと思いますけど、くどいですけどいまあるクラブ連盟が音頭をとって修正していけば一番いいと思うんですが、たぶんできないでしょう。

少し話は戻りますけど、掛川の場合、野球からすべてのスポーツの運営主体はスポーツ協会です。文化については文化財団。そこに費用が全部入り、けがや事故の対応もスポーツ協会です。いまのご時世、訴訟のこともあって大変だと思います。スポーツ協会は運営を主導し、各競技団体が実施主体となり、指導者を集め、選手を集め。そして大会とかマッチメイクをする。

デメリットもいっぱいあります。競技団体によって会費が違う。サッカーは月8,000円、野球は7,000円、卓球は3,000円。入ってくるお金が違うということは、謝金も違うかもしれません。指導者のなり手がいないんです。指導者を目指すのか、それともライフワークとしてそういうことに関わりたいだけなのか。考え方の違いは大きいです。

コーディネーションをする人は、清水ではエスパルスの山下さんだとお聞きしましたが、そういう方を掛川でも探しましたがいませんでした。月に最低でも10万円ぐらい出さないと、指導者の指導をしてくれる人、技術的なことだけじゃなく、「君の考え方は少し外れているね」と言えたり辞めさせることができるような人は、信頼のおける人じゃないと反発しちゃうと思います。

掛川では来年の8月ですべての部活がなくなるんです。

中村：来年ですか。静岡の1年前倒しですね。

伊藤：いまたいへんもめているのが吹奏楽部。吹奏楽って学校の施設を使うし、楽器の貸し出しのルール、それから教室を貸せるかどうか、セキュリティの問題などがあってもめにもめています。どうなるのかはわかりませんが、すべての競技が来年8月までです。来月、サッカー、野球、ソフトボールでは体験会をします。いまの6年生の体験会をやってスタートしていく。だからそれをみていただいて、ここは修正した方がいいとか、指摘してもらえればと思います。

中塚：掛川のケースについては、私の話の中でも紹介させてもらったロードマップ通りに進んでいるということですね。全国に先駆けて、運動部だけじゃなくいわゆる文化部も含めたものを地域で担う。掛川で「地域展開」という言葉が出てきたと思いますが、そういうのがスタートするんですね。

予定の時間にそろそろなってきています。今日の話をまとめるには至りませんが、とにかくこのテーマをめぐっていろんな問題が噴出していることはわかります。学校教育の問題だけでなく、地域の実情を踏まえて、どのように地域の人材、地域社会を育てていくかということ。短期的な視点と長期的な視点、個人の視点とチームやクラブの視点、あるいは協会や連盟の視点などいろいろあるので、引き続きいろんなところで議論していきたいなと思います。

個人的にちょっと心配しているのは、リーグ戦のところでも少し紹介しましたけど、サッカーのユースリーグの構想は、本当は他の種目にも広げてやっていこうというものでした。サッカータレントは年間通してサッカーをやればいいのですが、いろんなスポーツをやりたい子が実はたくさんいるわけです。前期はバスケ、後期はサッカーというように、いろんな種目を選択できるような環境にしたいと、ユースリーグ構想を考え、JFAの機関誌にも書きました。しかし競技団体マターになってくると、どうしてもその競技に年中関わらせたくなりがちです。大人の側は選択肢を用意してあげればよくて、選択するのは子どもの側です。自由に行き来できるような環境になればいい、子どもを縛らないことが大事だと思います。

最後に、オンラインで佐賀県から参加されている、大学同期の坂元さん。いきなりのめちゃぶりですが、感想を一言もらえますか。

坂元：ありがとうございます。私としてはいろんな種目の話が出てくればと思っていたところです。

清水のような中核都市であればうまくいくことも多いと思いますが、佐賀の場合、例えば県下中学校でナイター施設があるところは1校もありません。5万人規模の小規模の町で形成されている県なんです。そういうところでクラブを1つ、2つ立ち上げたとして、おそらく清水ほどのクラブ員数は獲得できないわけです。10~20人ぐらいでしょう。そうした中で、皆さんはこれから財政基盤をどうやって考えているのか。おそらく会費だけではコーチ1人分しか出ないだろうし、土日の試合引率のお金を出せるかどうかも問題です。助成金で行くのかクラウドファンディングか、それともNPO法人化して何か別の助成金をとってくるのか。いろんな方法があるんですが、清水では、例えば応援してくれる企業は強いと思いますけど、企業のスポンサーを受ける活動はされているのか。そのあたりを最後に聞かせていただければなと思います。財政基盤をどういうふうに考えておられるのか。清水協会が大きなお金を集めて来るのか、各クラブの裁量に任せるスタンスでいくのか。そういうところはどのようにお考えなんでしょうか。

外岡：お金の方は協会が集めてこようと思っています。こういった活動に賛同していただける企業が出てきそうなので、なんとか継続していきたいと。ちなみに言うと、リーグ戦への命名権やユニフォ

ームへの広告表示などをてこに、企業側にもメリットがあるような部分を見せてています。企業側からは、我々のアクション、社会活動に対して興味があるというようなご意見を、幸いにも承っています。実際にスタートした時に、ある程度の資金をご提供いただけるという目算は立ててあります。

中塚：どうもありがとうございました。議論は尽きませんが、この場はそろそろお開きします。リアル会場の方では少しずつ料理が運ばれようとしています。残れる方は飲み食いしながら、オンラインの方ももう少ししゃべりたい方がいらっしゃると思うので、しばらく開けておきます。

中村さん、そして清水の皆さん、本当にありがとうございます。今後の実践に注目して参ります。会場、そしてオンラインの皆さんもご参加いただき、どうもありがとうございました。

以上（同会場での懇親会に続く）